

---

# 東方薬師見聞録

五月雨亭 草餅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方薬師見聞録

### 【Nコード】

N9047Y

### 【作者名】

五月雨亭 草餅

### 【あらすじ】

知らない間に、というか気がついたら見知らぬ森の中に飛ばされていた。

彼は、自らの名前すらをも思い出すことができなくなっており、その場で自分のなまえを定める、『出雲』と・・・・・・・・・・。時を同じくして、神々の住まう天界は荒れていた。

新しく作った世界に間違えて人を送り込んでしまう事故が多発していたのだ。

そんな事故の犠牲者の彼は、知らない間にチートをもらい、その力

で生き抜いていく。

この物語は『人』、『妖怪』、『神』とふれあい、『世界』を、そして『歴史』を見つめながら生きる彼を描いたものである。

出雲、異世界へ飛ぶ。(前書き)

どうも、寂しがりやの五月雨です。

ソードアート・オンラインと悩んだ結果、こちらにしました。

『武器と魔法と技術と知識は使いよう』や、『僕達のIS 』《イン  
フィニット・ストラトス》』とは、ちょっと違った感じの主人公で  
すので、おかしいところがあるかもしれない。

何か問題があった場合は、どしどし送ってください。

では、東方の二次をお楽しみあれ

## 出雲、異世界へ飛ぶ。

ここは・・・・・・・・・・どこだ？

さっきまで俺は自宅にいて、和室に日本刀を取りに行った。

その後、道場に行こうと扉を開けたらこれだ・・・・・・・・・・

俺は一人、森の中にいる。

べつに他に何かをしたわけじゃない。お地藏様を蹴ったり、神社の鳥居を壊したりなんていう罰当たりな行為は一度もしたことがない。それに、神様に会ったりしたわけでもなく、なぜか森の中にいる。良く森の木々を見ると、凶鑑などで見たことのあるような樹ばかりだ。

なんと言えば良いんだろうか？

えーと、恐竜図鑑とかで見ると感じるような感じなやつ、あれだ。んで、何で俺はこんなところにいるんだ？

冒頭にも言ったが、大事な事だからもう一回言っというた。

とまあ、そんな不運に合っている　　だ。

？あれ、俺。名前何だっけ？

やべえ、思い出せねえ・・・・・・・・・・。どうしたもんかなあ。

まあいいや、思い出せねえもんはしょうがねえ。新しく自分の名前ぐらい考えるか。

そうだな・・・・・・・・、苗字は後だ。

とりあえず、名前だけ決めておこう。

俺の出身は日本の島根県だった。

だから、昔の地名は出雲か石見だったわけだが・・・・・・・・。

石見なんて名前は格好悪いな。じゃあ、出雲だ。俺はこれからは出雲と名乗ろう。人と会えれば、の話だけだな。

まあ、なんだ……。腹が減ったし、なんか食つか。  
出雲は、実のなった木へと歩み寄っていった。

そのころ、とある天界では……………

「ああああー！ー！ー、やっちゃった。間違えて一人違う世界に送っちゃった。どうしよう」

一人の神が、パソコンのような機械の前で頭を抱えながら叫んでいた。

当然、その姿はとても目立ち、周囲の神が何事かと集まってくるありさまだった。

「どうしたの？」

様子を見にきた神の一人が、訊くと、

「間違えて違う世界に一人送っちゃった」

頭を抱えたまま、一人の神が答える。

「ああ……………。多分×××のせかいでしょ？」

「何で分かるの？エスパー？某学園都市で教育受けてきた？」

「違うわよ……………」

一人の神の疑問はあっさりと切り捨てられる。

「まあいいわ。×××の世界はできたばかりでしょう。さっきからその世界に間違えて送り込む事故が多発しているみたいよ。送り込む時代は違うみたいだね……………」

「へえー！ー。じゃあ、アフターケアとかしなくても大丈夫かな？」

「ダメに決まっているでしょうがつつつつ」

天界に、小気味のいい、炸裂音が鳴り響いた。

「まったくもう、あいつも本気で殴ることはないだろうに。それだから男勝りとか言われて婚期を逃すんだよ。はあ……………」

×××のせかいだから能力でもつけてやれば大丈夫だよな？」

先ほどの、ミスをした神は、残像が発生するほどの速さで、キーボードに何か打ち込んでいた。

「えーと、いいや、とりあえずは『自然を操る程度の能力』にしておこう。この能力がどうなるかは、彼自信の努力によってだね。あとは、不老不死ぐらいでいいか？さあ、これでよーし」

陽気なままの声で、処理を終えた。

今後彼がどうなるうが、自分の責任だはないといわんばかりの明るさで……………。

まあ、もしこの神がそんな風に彼を扱ってしまったえば、先ほどの婚期を逃してしまった神から肅清を受けるであろうが……………。

出雲、異世界へ飛ぶ。(後書き)

感想等を書いていただけると幸いです。



## 出雲のパーフェクト恐竜狩り教室（前書き）

どうも、寂しがり屋の五月雨です。

これまで僕が書いてきた二次とちがっておちゃら気が多いこの二次ですが、よろしく願います……。

## 出雲のパーフェクト恐竜狩り教室

どうも、知らない世界に19歳の誕生日の日に転送された出雲だ。

まあ、このまえ暑いから風ふかねえかなあー。なんて思ったら風が吹いて、もしかしてと思って気温が下げれと念じたら本当に下がってしまったて驚いたわ。

で、まあ実験してみるべしということでも雷落ちろと念じたらまじで降ってきやがった。

いやあ……。冗談のつもりだったからけっこう近くに落としちゃまって軽く感電した。良く死ななかつたと思うよ。

で、どうやら、とりあえず人はいないらしい。なぜか？かんたんだ。

そこらじゅうに恐竜がいるからだ。

HAHAHAHAHA、さすがに最初に見たときはビビッタぜ。でまあ、食われそうになつたから雷落として殺した。

うん、まあ適度に焼けていてうまかつたかな？

とりあえず不味くはなかつた。

で、ここ最近、つかえることに気づいてしまった能力の鍛錬に当たっているわけだ。

いろんなことを試してみたところ、俺は自然を操ることができるらしい。まあ、かなりいろんなことができる。

このまえは、恐竜の周りに酸素と水素集めて、そこに火を投げ込んでポポポーンしてきた。

かなりチートな能力だけど生きていくのには不便じゃねえどころかかなり便利だ。

だから、なんだかんだいってもこうしていきとられる。まあ、ありがてえ話だ。

んじゃ、いっちょいきますか。

雷の音で右肩の蝶……。ミュージックスタート。



**出雲のパーフェクト恐竜狩り教室（後書き）**

感想などいただけるとありがたいです。

## 出雲、集落を見つける

ああ、ここに来てから何年経つんだろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・。  
時という感覚が俺の中でどんどんと薄れていく。

もう、数百年ぐらい経っている気がする。どうやら、とりあえず俺は不老だ。それだけは自信を持っていえる。

じゃなきゃ、こんなに長く生きられないし、姿が全く変わらないのはありえない。

ただ一つ言えることがある・・・・・・・・・・・・・・・・・・。  
自分ひとりの世界はつまらん。

確かに、恐竜がいるが、別に会話できるわけじゃない。

食う側と食われる側の関係だけだ。

自分の能力もほぼ完全に使いこなせる。

もう、何かをするにも事務的な行動になってきちゃった・・・・・・・・・・。  
。。。

はは・・・・・・・・、

「人が懐かしいな」

夕闇に沈みかけた世界で小さな波紋が広がった。

ああ、どうも。出雲だ。せめてもの娯楽にと酒を造ってみたが・・・・・・・・  
。。。

飽きてしまった。最初の数年は良かった。

創意工夫というものがあって、徐々に色々と考えさせられたりもし

た。

完成してから何年かも、味の改良とかで夢中になれた……

……

……

ただ、それも過ぎれば飽きてしまうものだ。  
と、まあ、森を歩いてるわけだ。  
なにも考えなしに歩いてるわけじゃないぞ。なんかこつちからいい匂いがするんだよなあ。

なんていうんだっけ？ほら、あの白黒や茶色で、角の生えた生き物。えーと、……。まあ名前はどうでもいいが、あれを焼いたような匂いがするんだ。

なんつうんだろうな、いい匂いって感じだけじゃなくて、懐かしさも感じられる。

勘違いかもしれないが、ちょっと気になるんだよなあ……

まあ、この時代に人間はいるわけないか。未だに恐竜の跋扈している時代だもんな。

あー、でもこのまえヘンなの居た。蜘蛛の脚持ってて、体が人で、頭がティラノサウルス、両腕がカニのはさみだった。

まじで気味が悪かったから雷で焼こうとしたら、一発で焼けなかった。

あんなマジな戦い始めてだ。

最終的にあいつの体の表面を水でぬらしてから、雷の雨を鬼のように降らしたら30分後ぐらいに止まった。

やっぱり気持ち悪かったから屍骸は水素と酸素でポンしといた。で、結局あれなんだったんだろうねえ？

あのあと、数日後に見に行ったら屍骸がなくなってたしね。余計に気になるよ。

もしかして復活したとかだったら面倒くさいことこのうえない。  
ん、匂いが強くなった。

そろそろか……

顔を上げた出雲の前に広がっていた光景は、戦国時代ぐらいの人の  
集落だった。

出雲、集落を見つける（後書き）

感想などをいただけるとありがたいです。

何気なく勢いで書いている小説なので……。



## 出雲、怪我をする

人里だ・・・・・・・・。。。

塀に囲まれた中の建物の集まりからは、子供のはしゃいでいるような声が聞こえる。

なにか食べ物を焼いているような匂いや、煙も上がっている。

戦国時代みたいな建物だが、取りあえずは人の集落だ。

いやあ、もう、縄文時代始まってたんだな。気が付かなかった。いくら山を挟んで反対側のこととはいえ気が付かなかったのは残念だな。

「つて、ちよつとまで、おかしいだろ」

やべえやべえ、おもわず独り言を・・・・・・・・。

というかまだ恐竜生きてるし。

どの教科書にも恐竜と人類が同時期に生きていたなんてこと書かれてなかったぞ。

ただ単に、まだその遺跡が発掘されていないから分かっていないのか。

それとも、その事実が判明すると問題がるから隠ぺいされているのか。

もしくは考古学者が遺跡を見つけていても年代を間違えていたり、素人が見つけたことに怒りを感じて嘘の発表を行っているかのどれかだろ。まあ、中にいるのが人ならという話だが・・・・・・・・。。というか人だよな。人以外はまずあり得ないし。

「まあいいや、とりあえず門でも探して中に入らしていただくか」

「おい、門に変な妖怪が来たらしいぞ」

「なんでも人の姿をしているとか……」

「妖怪も進化しているのか？」

「分かん」

「まあ、なんにせよ、汚らわしい妖怪なぞという種族は」

「……殺してしまえ」

「……根絶やしにしてしまえ」

「皆の衆、武器をとれ」

「……」

扉の内側のある広場のにいた男達の会話より、抜粋……。これが村長を中心とする、人里の大多数を占める大衆の意見であった。

「う、ううううううさ。さつさと森に帰れ妖怪」

「だから俺は妖怪じゃなくて人間だって、失礼だな」

「どうやら俺は、森から来たせいで妖怪と間違われているらしい。で、自分は人間だって言っても信じてもらえず、弓まで向けられているありさまなのだが……」

「いい加減に信じるよ。それにそんな構え方じゃ矢を放てねえだろ。自分に弓の弦が引つ搔る、だからもう少し体から弓を離して構えろ。そうすれば上手く射れるようになるぞ」

「だ、ま、れー。さつきからお前のせいで調子が崩されっぱなしだ、妖怪。さつさと森に帰れ」

この弓すらまともに構えられていないバカな銀髪っ娘の門番に入れさせてもらえない……。時間の無駄だ。まあ、バカなこいついじるのも楽しいんだけどな。

というか………。

「おまえ、戦いに関してはド素人だろ」

「!!!!」

どうやら、凶星みたいだ。いやあ、にしても見ていて楽しいな。顔を青くしたり、赤くしたり、冷や汗を物凄い勢いでかいたり……。

「怪人20面相？」

「違うわよ!」

あんまりこうやって戦いのさなかに喋るのは戦慣れしているものとしてはおかしいんだよなあ……。だから素人つてばれだし。それに少しはポ・カーフェイスを身につけないとそこをつけ込まれるぞ。

「お前面白いな。名前は？」

「妖怪が普通に名前を訊くなああああ」

本当に馬鹿だ………。

まあいいか、みんながみんな感情を殺すようなやつだと誰も楽しくないしな。こういう奴がいたほうがみんな楽しいだろ。

「ふーん、俺は『人間』の出雲だ。よろしくな」

「よろしくないわつ。あんまり人間のふりをすんな。妖怪つてばればれだし」

「だから妖怪じゃないつての………」

前言撤回、馬鹿すぎても大変なだけだ。

はあ、誰か俺を人間だつて認めてくれる奴いねえかな？

そろそろ中に入りたいし、腹も減ってきた。

「なあ、いい加減に？かはっ？」

何で俺の脇腹に矢が刺さつてんだ？あの銀髪は射つてねえ。じゃあなんで？

ヤバいな……。脇腹の痛みが半端ねえ。

血もどんどん流れてる。この状態で森の中に入ったら、恐竜や妖怪を引きつけて、怪我の影響で口々に戦えずに餌になつて終わりか……。

「……………」

「永琳、下がっておれ。後は我々がやる」

「そ、村長？何故ここに……………」

「お前が妖怪を殺ってないって聞いたからな」

「阿草あくささんまで!？」

「俺達もな……………」

「な、なんでみなさんが」

「そうか、あの銀髪っ娘以外の里の奴が来たのか。それで妖怪と勘違いされたままの俺は射られた、と。」

「それもだが、妖怪だからって普通に殺していいもんかよ。俺だつて襲われた時しか妖怪は殺してないぞ。恐竜は襲われた時と飯の時だけだな……………」

「行きなさい、あなたがもし本当に妖怪でないのなら早く逃げて」

「何を言っておる永琳。人間はこの里にしかおらんのだぞ」

「……………」

「へえ、あの銀髪っ娘、永琳っていうのか……………」

「わりいな、永琳とやら。森に逃げさせてもらう」

「それだけ言つと、出雲は森の方へと逃げだす。」

「永琳、何をしておるのだ。ええい、皆の衆、射れ、射るのじゃ」  
村長が喚くとともに、村長に追従していた男衆が矢を射るが、しっかり狙えていないのか、見当違いの方向へ飛んでいくものすらある。そして、その間に出雲は森の中へと入り込んだ。

「やばいな。意識がもうろうつとしてきやがった……………。はは、森の中に逃げて最期…………。か…………。まあ、あいつらに首をとられるよりはマシか。永琳とかいうのには悪かったな。過ぎたことは悔やんでも無駄か……………」

ははは、参ったな。こりゃ。あっちの藪がガサガサと揺れてやがる。  
もうなんか来たか・・・。

「お、おい。大丈夫か人間。おい、誰か来てくれえ」

俺が最後に目にしたのは、不思議な格好をした人型の生き物だった。

## 出雲、怪我をする（後書き）

早いかもしれませんが、永琳出してみました。

というか多分ですけど口調違いますよね？

原作を実は持ってないので分からないのですが、取りあえずの設定は、昔だから。ということにしておいてください。

感想など頂けるとありがたいです。

ついでに東方のキャラの口調を教えてくださいただけると嬉しいです。

## どうやら鬼の屋敷か？

「まだあの人間は目を覚まさないの？ンブッ」

「ああ、しかしなあ……………ゴクッゴクッゴクッ、何で人間なんか助けたんだ？」

「ぶふあー、さあなあ……………。なんかあいつは他の人間と違う気がしたんだ」

「なるほどな。にしてもングツングツ、目覚めるのが遅すぎないか？あの日からもう一週間は経つだろう？」

「いや、今日で10日目、ふう」

さつきから意識がだんだんと戻ってきた。

けどまだ、目を開くことができない。

んで、どうやら頭の方に居る奴らの話を聞いていると、もう10日も経つたんだとか……………。

俺良く寝てたなあ、そんなに。

それに……………、俺は生きています」。

まあ、話を聞いている限りの感じからすると、この人たちに助けられたみたいだが。この人たち以外にも、あちらこちらでドタバタと走ったりする音が聞こえてきている。

別の集落の人間に助けられたのかって思ったが、どうやら違うようだ。

妖怪かなんかだろう。妙に酒臭いから鬼か？

どうやら俺を食べるつもりではないようだし、もう少しゆっくりさせてもらうか……………。

俺の意識は、ものの数秒もかからずに再び深き暗闇へと吸い込まれていった。

「さつきほんの少しの間だったけど意識が戻っていったな」

「ええっ！？なんでその時に教えてくれないの、葉華よしかあ」

葉華と呼ばれた二つの角が生えた少女は眉をひそめると、自らの正面に居る少女におまえなあ、と喋ってからじぶんの考えていることを伝える。

「美月みつき、おまえは目が覚めたばかりのこいつに酒飲ませる気だっただろ」

「何か悪いの？」

美月と呼ばれた角が一本の少女は、何がおかしいの、と表情かおに書きながら首をかしげる。そんな様子を見て葉華が額を抑えても、自分のどこが悪いのかを自覚していないようだった。

「こいつは私たちみたいなの『鬼』という種族じゃないんだぞ。病み上がりに酒なんて無理だ」

「ええー、そんなあ」

「四天王なんだから少しは知恵をつける」

「知恵が無くても勝てるもん」

ほお、と葉華は小さく口に出すと、顔にどこか悪戯が好きなき子供のような表情を浮かべながら、美月を見る。それと同時に彼女の手は何やら怪しい動きになり・・・、葉華は美月へ飛びかかり、押し倒した。

葉華の手は美月の衣をはぎ取り、彼女の素肌に触れる。

「ひゃっ、や、やめっ」

美月は抜け出そうともがくが、葉華はいつさい動かず抜け出すことができない。

葉華の指は、美月の素肌を舐めまわすように素早く蹂躪する。しか





鬼には準うつ病患者がいるらしい。(前書き)

慣れない携帯投稿

鬼には準うつ病患者がいるらしい。

どうも、出雲だ。

また目が覚めたから今度こそ起きようと思って上体を起こしたんだが……どうしてこうなった。

俺の目の前で二本角が生えた女子の鬼が着替えている。

そして、目が合ってしまったようだ……。まあ、とりあえず。

「ここはどこだ？」

あえてツッコミ(=)・(ノ)は入れないことにした。たぶん気にしたら負けというやつだろうからな。

「きやあああああああああああ」

どうやら意味はなかったらしい……。……  
……。……はあ、残念だ。

「じゃあここは鬼たちがすむ山の屋敷の1つなのか」

「あ、ああ。うん、そうだ」

手を後ろで縛られた1人の黒髪の青年と、顔をどことなく赤く染め上げている二本の角を生やした白髪の少女が、とある屋敷で対話をしていた。

「ところで……。この縄、いつになったら解いてくれる？」

「ほ、解いてなどやらん！」

「いくらなんでも酷くないか？」

「うるさいケダモノ。私の裸を見て発情しおつて」

発情した覚えはさらさらないんだがな……。何百年も1人で生きてきたせいだろうな、全然そういう感情が湧かないしな。

「別に発情した覚えは無いが？」

この前のバカ門番もそうだったようにどうせそんなに人の話は聴かないだろうが言うだけ言っておく。自分の精神衛生上のためにな。

「どうせ私は母さんみたいな巨乳じゃなければ、美月みたいな口リボデイでもないさ。別に特徴できなところなんてないシヨボい体だし人間の男にすら発情されないのさ。悲しくなんてないさ。哀しくなんてないさ。寂しくなんてないさ。泣いてなんかないさ。悔しくなんてないさ。淋しくなんてないさ。ああ、なにもないさ。胸だつて平均ぐらいしかないさ……。」

「お、おい。お前大丈夫か？」

うつ病とは違うだろうしな。大丈夫なのか、鬼つてのは。まさかみんなこんな準うつ病患者じゃないだろうな？

そんな出雲が疑問を抱くなか、時は過ぎていった。

## 鬼の里にて

どうも、年寄りの出雲だ。

どうやら今日は鬼達の訓練場のある、山の中腹まで行くらしい。

これまでいた屋敷は、そこより300mぐらい低い位置にあった。

「なあ葉華、あそこの里の人間はなんで妖怪をいやがるんだ？おれも妖怪っぽいのを殺したことはあるが必要最低限しか殺してないぞ。それに比べてあいつ等はいまにでも殲滅しようという勢いだっじやねえか」

助けられる前から気になっていたことだ。銀髪門番の奴は妖怪だからだっと思ってたが、理由が分かんない。怖がる必要もいやがる必要も俺には分かんないんだが………。

あ、そうそう、葉華つてのは裸を俺が見ちまった鬼だ。

「………」 『怨み』だ

葉華はそういうと、表情を暗くする。先ほどまでは楽しそうな表情を浮かべていたというのに一瞬で大きく変わってしまった。

『怨み』もしくは『恨み』……、だれでも持ったことがあるのではないだろうか？

たとえば、あなたが学生だったとしよう。

自分よりも悪いことをしている奴はたくさんいるというのに、先生はあなたばかりを怒る。当然、あなたは先生と、自分より悪いことをしている奴らに対して苛立ちを覚えるだろう。一度ぐらいなら恨みまでは発展しないかもしれないが、何度も繰り返されれば………  
………  
あなたはその先生と、他の生徒を『怨んだ』だろう。

社会人ならば、自分と同期で入ってきた奴が、自分よりもまともな仕事をしていないというのに、会社の上役にそいつの親がいるという理由だけでどんどん出世していく。これは生活にもかかわって

る問題だ。あなたは『怨む』だろう。

だれでも一生に一度はもつであろう小さなことだ。

しかし、それは自分個人の一生や、自分の周囲の運命を操るだろう。そして、歪めるだろう。怨みとはそういう存在だ。

そして、今は怨みによって、人間の里と妖怪は相容れぬ関係になっている。

「むかしな、まあむかしといっても100年ほど前の話だが。この山よりももっと人里の近くに草原があっただろう?」

「ああ、屋敷から見えたな」

それは広いこと広いこと、里と山の間の距離が目測で『10km』  
overってところだったんだが、その間100mぐらいを除けば、  
全部草原だった。里の周囲100mぐらいは森に囲まれてる。で、  
里を挟んでこの山の対角線上に当たるところは山脈になっている。  
そこより向こうに、俺はこれまで住んでいたんだけどな……  
……

で、草原には、どうやら背の高い草もあるらしく、高い草は6mにも及ぶとか。

「今は30もないがクマの妖怪がいてな。当時は1500以上はいたんだ」

「おいおい、いくらあの草原とは言ったって……。クマの妖怪を1500以上は養えないだろ」

クマの妖怪は、確かに形はクマだ。形は……。大きさは、成長したヤツが立てば大きいもので10mはあった。そんな奴が食べる量はすさまじい勢いだ。立つ鳥跡を濁さずとはいったものだが、本当にヤツらの後には何も残らない勢いだ。

「もちろんだ。むかしはもっと里も大きく、今以上に活気があったんだが……」

「ヤツらが襲ったと」

「そのとおりだ。柵を壊し里に入り込み、家を壊して人を喰らう。

抵抗もしたようだが当時の武器ではとてもではないが齒が立たな

った。一瞬のうちに里の半数以上の人間が死んだ。ヤバいと気が付いたらしく、ばらばらになって逃げ込んだ先がちよつとした林だったようだ。林の中にはクマどもは入れん。ヤツらを知っているということは分かるんだろう？」

ああ、ヤツらはその力と体のせいで、

「森の中に入るには体が大きく、無茶をして入れれば大きな傷を負うからな」

「その件を境に人里の者たちは妖怪を怨んだ。そして人の中に妖怪退治を専門にする者たちが現れ始めてな、そいつらとそいつらの加護を受けた武器を手に持った連中がクマの妖怪を狩り始めあつという間に今の数だ。おまえに放たれた矢もそいつらの加護を受けていたよ。妖怪にとつては完全な毒だが、人間にとつてはそこまで危険ではない、有毒ではあるがな」

「なるほどなあ．．．．．」

そういう歴史があつたからあんなに里の連中は妖怪を毛嫌いしたのか。

つて、ちよつと待て。

「その加護とやらが人間にも有毒ならなんでおれは生きてるんだ？」

「ああ、門番の銀髪娘が薬師だつたらしくてね、物見の鬼が里の様子を見に行ったときに、森の中に薬が置かれてたんだよ。書きおき付きでね。で、あの門番の娘がお前のために作った解毒薬だったから遠慮なく使わせてもらったのさ」

「．．．．．。2回も助けられたのか．．．．．」

何度お礼を言っても足りないくらいだな。

どうしたものやら．．．．．。

「お、着いたよ」

葉華の指さす方には、たくさんの鬼が一つの大きな広場を囲むようにして座っていた。

「折角だし言っておこうか。ようこそ、鬼の里へ」

大自然 『薬師出雲』 V S 鬼神 『大雉牙煉』

「ほう、そ奴が人でありながら人里に住んでおらんという・・・」  
「変わった奴だな」

「あらあら、おもしろいじゃないのさ。・・・でもよくこれまで生きてたもんだねえ」

「強いんじゃないの？」

「じゃあやりあうか？」

「まずは鬼神様からさね」

「どーでもいいや、いまの人間になんて興味ねえよ」

「随分連れないこと言うじゃないかい」

鬼つてのは好き勝手な奴が多いらしい。一応、俺がここにいるのを待ってはいたみたいだが、みな口々に俺の評価を始めている。まあ、鬼評価されるなんて一生に一度あるかどうかの珍しい体験だろうしひよかを受けとこうじゃないか。なんて思っていたんだが、あんまり評価というより誰から戦うかの話に変わってる気がする。

本当に気楽だな、草原のクマ妖怪が全滅すれば次に狙われるのはこの鬼達だろうに・・・。。。

まあ、どうせおれも家まで帰る気はないしここに居座ろうかと考えていたから一緒に人間と戦うんだろうけどな。

「で、俺は戦えばいいのか？葉華」

「はあ？あんたみたいな弱い人間が戦ったら死んじゃうよ。あたしら鬼とはレベルそのものが違うんだから」

葉華は何をバカなことを、という顔を向けては来るが・・・。。。

「でもあちらさんがたはやる気みたいなんでねえ」

どうやら俺を待っていた鬼の大半の理由は俺と殺しあうことらしい。



相手の強さを知るために相手と殺しあう。さすがは妖怪の中でも種族そのものが最高レベルの強さを誇るだけはある。

「おまえら……。バカか、こいつは人間なんだぞ」

葉華は声を荒立て、他の鬼達を帰らせようとする。

自分で行っていた限りは、葉華は鬼の四天王という奴の3番らしい。で、俺が一瞬だけ目を覚ました時にいたのが2番だったとか……。あんなちびが？とはおもったが、見かけには寄らないということだ。俺だつて見た目は18とか19そこらにしか見えないが実際は600年は生きてるもんな。

「ふん、とはいえしきたりを忘れたわけではあるまい」

「そうだ、この山のしきたりをな」

「何の問題があるってんだい？」

「いや、だがこいつはにんげ「葉華よ、我らが山のしきたりを忘れたか」き、鬼神様！」

ん、どうやら四天王より上っぽい存在か……。

つてことは実力社会の鬼の世界。

鬼の頂点、鬼のかしら……。か……。。

「で、しきたりつてのはなんなんだい？」

出雲は顔に子供のような笑みを浮かべながら口にした。

それを鬼神は認めると、

「鬼の強いものから順に新たにこの山にすむものは戦っていくといふしきたりだ」

同じく子供のような笑みを浮かべながら返した。

二人の間に種族という怨みは存在しない。

存在しているのはただ一つ。

こいつはどれだけ強いんだ？

ただそれだけ。好奇心だけである。

「面白いしきたりだ。人のみだが挑戦させてもらおうか」

「ほう、いい度胸だな。お主、名はなんと申す」

鬼神に訊かれた質問に一瞬だけ出雲は固まる。彼は名字を持ってい

ない。否、思い出せない。だから何と言っているのかが分からなかったのだ。だが、次の瞬間には返答が決まっていた。

あいつ、銀髪門番の永琳は薬師だったな……ならかんだ。

最初のお礼は

「『薬師出雲』だ」

俺の名字にするさ、お前の仕事をな。

「良い名だな。我はこの山の頂点、鬼神の大雉牙煉だ」

「『じゃあ、おっぱじめっか』」

大自然を司るものと、鬼達の頂点はついに激突した。

## 古之大魔法雷

「おおおおおおおおお」

周囲の鬼達が下がるより前に二人は闘いの火蓋を落とす。

牙煉がれんは右手を腰の位置に下げ、一突き。たかがそれだけ、されどそれだけ。

空気が急激に圧縮され、伸びる場所を探してそのまま飛び出す空気の砲弾と成して……。

「すごいな、ただの一突きでそれとは……」

牙煉がただの力が強いものではなく、高い技術も持ち合わせていることに気付いた出雲は体をそらして空気の砲弾をかわすと、反撃に無数の空気の砲弾を返す。

こちらは、牙煉のようにして作ったものではなく、能力で作ったものであるのだが……。

「むっ!？」

威力は牙煉の放ったものに勝るとも劣らない。鬼とはいえ、喰らえばただでは済まないだろう。

これぞ600年の年の功といえるだろう。とはいえ、空気の砲弾は最初の30年ぐらいで完全に習得していたのだが……。

牙煉は全てを紙一重でよけると、右手に妖力の弾を大量に生成し撃ち出す。

「……マジかよ」

出雲はそうは言いながらも、自らも霊力の砲弾を大量に生成し相殺するように撃ち出す。

二人の間で、鮮やかな弾幕がぶつかり、爆ぜる。それは虹を見ているようであった。いや、虹というより多彩なオーロラだろう。一時としてまったく同じ姿は見せない。急激に姿を変えて見せたり、緩やかに少しずつ姿を変えて見せたりする。

鮮やかで、美しかった。

「強いな……」

誰が言ったのだろうか。牙煉だったのかもしれないし、出雲だったかもしれない。もしくは見ていた誰かだったのかもしれない。しかし、そこにいたすべての者が目の前の者を見てそう思っていた。

「少し……、本気を出させてもらおうか。ここまで面白い相手は初めてだからな」

「へえ、まだ本気じゃなかったのか。いいさ、来いよ。受け止めて倍返しにしてやるさ。俺が諦めない限りはな」

バチツバチツバチツバチツ

牙煉の周囲から異様な音が流れる。それは、特殊な生き物いがいの普通の生き物としては、普通はならせるはずのない音。

電撃の音である。

牙煉の体には紅蓮の雷が纏わりつく。さらには、紅蓮の炎も。

「能力持ちでな、雷と炎を操ることができる。これに三十秒も耐えた者はいない。せめて10秒は耐えろ」

そう言い終わるか否かのタイミングで、さらに周囲へと放出される鬼神の妖力は跳ねあがる。

そして出雲へと殴りかかり、その腕は出雲の頭を『貫いた』……

……

「きゃあああ」

「え、おい」

「うそだろ」

鬼達からもどよめきの声が発せられる。

「……。いくら強いと言っても所詮は人間か……。すまぬ、薬師出雲よ」

牙煉は顔に悲しみを浮かべながら、出雲の頭から腕を抜こうとした。

「ぬ、抜けない？」

いくら強く引こうが、牙煉の腕はまったく動かない。抜ける気配すらない。

「勝手に殺すなよ、鬼神」

その声は、鬼神の度肝を、さらには観客の鬼達の度肝をも抜いた。なぜなら上空から声が聞こえてきたからだ。

恐る恐る鬼神が上を向くと、薬師出雲が傷一つない状態で宙に立っていた。

「な・・・ぜ・・・？」

「簡単だ。おれもお前と同じように能力もちさ。俺の場合は自然を操れる。今お前の腕が貫いているのはただの丸太だ。光という自然を操ってここに居る鬼達からは俺に見えるようにした。そして、硬度と粘着力を底上げした。だからいまお前の腕は抜けないんだよ」

「なんだと？」

牙煉の顔には何時の間にも、という疑問が浮かんでいたが、あえて出雲はそこを無視する。

「まあ、今の状況は確実に俺の方が有利だな。嘘が嫌いな鬼の前でこういう小手先の技は余り使いたくなかったけどな、これが俺流だ。さて、今度は俺の番だ」

そう言うなり、出雲の手には青白いような光が大量に集まっている。

「エンシエントマスターアアスパアアアアアアアアク」

鬼神を巨大な光が飲み込んだ。

## 月夜の晩に語る

「いやあ、まさか負けるとは思わなかった」

「ただの偶然だ。次に最初っから本気を出されたら負けるよ」  
どうも、出雲薬師だ。

鬼神大雉牙煉に勝ったから後は戦わなくていいらしい。ということ  
で、これまで泊めてもらっていた葉華と美月の屋敷に居候させても  
らうことになり、俺の正面には『鬼神』大雉牙煉が杯と徳利を片手  
に座っている。

「満月の月夜の酒は格別だな」

「ああ……」

俺も右手に持った杯で酒を飲み、上を見上げ金色こんごうに輝く満月を見上  
げる。

月……か……

月にうさぎってのは本当にいるのだろうか？

火のないところに煙は立たない。

噂にも何らかのはじめがあるはずだ。それはもしかしたら本当にう  
さぎがいたのかもしれないし、月の模様がウサギに見えたからなの  
かもしれない。未来では分からなかったことだ。

いない、ことになってはいる。見つかっていないし、月に生き物が  
生きて行くのに水が無いんだっただけか？俺はあんまりそういうこと  
に詳しくはなかったからな。

「人が我ら妖のどちらかが月に住まえば争わなくてもいいのだがな  
……」

「おいおい、どうやって行くんだよ。それに月に住めるといふ確証  
はない」

「それもそうか」

フツ、と一瞬だけ牙煉は笑うと一息に杯に入った酒を飲む。

「一ヶ月後、宴がある」

「宴？宴会か？」

「いや、違う。我らこの山に住まうもの達は一年に一度の宴で序列を決める」

「ああ、戦か……」

鬼の序列、すなわち強さの順番。

それを決めるのは鬪いでしかない。他に強さの序列を何で決めるといふのだ。

鬼達にとっては鬪いすら遊びのようなものでしかない。弱い妖怪にとつては生きるか死ぬかの大きな局面ではあるが……

「鬼神の名は鬼しか受け継げぬ。だが、お主も参加せぬか？」

「おもしれえ、お互いに最後の二人になるまで残るぞ」

「ふん、もう一度お主と戦うのか……。いいだろう、次こそお主に膝をつかせてやろうではないか」

「何言ってる、また俺の勝ちだ」

二人は同時に杯を煽った。

「あいつは強かったな……」

「そうだね、鬼神様が負けちゃったもん」

出雲と牙煉のいるのは別の縁側に葉華と美月は居た。

いくら小さいとは言っても美月は鬼だ。自らの体より大きな瓢箪に酒を入れてあるらしく、普通に飲んでいる。

葉華といえば、杯を持っているものの、先ほどからあまり飲んではいないわりに頬を赤く染めている。とはいえ、人間と比べれば飲み過ぎの部類に入るのだが……。

「もしかしてさあ、葉華は惚れちゃった？」

「な、バカなことというな。私が人間に惚れるわけが無かるう」

「だれも出雲のこととは言っていないよ」

「つゝゝゝ！！！！！」

「あはははははははは、葉華ったら面白いんだから  
鬼とはいえ、心は人と変わらない。」

人以外の生き物であったとしても感情は持ち合わせているのは当たり前だ。

彼女らなら少女の心を……。

「多分だけど出雲は鈍感だよ。まあ頑張ってね」

「うるわいわあっ」

酒瓶を棍棒のように葉華はふりまわすが、美月は全てくるくると回るようにしてかわす。

「あはははは、葉華は可愛いね」

「死ねえ」

「あははははははは」

彼女らの追いかけっこは陽が昇るまで続いた。

「なあ鬼神」

「ん、なんだ？」

酒ではなく、焼き魚を一人の青年と一人の鬼が一匹ずつ食べていた。  
「俺を怨んではないのか？」

「何を怨む必要があるのだ？」

鬼がそう返すと、二人を静寂が包みこむ。遠くから聞こえてくる少女達のかわいらしい声を除いて。

「おまえは鬼神と言われて無敗伝説を築いてきた。それを一人の人間に崩されたことだ」

青年は箸を置き、鬼の質問に答える。

青年にとって一番気になっていたことだった。鬼神は生まれてこの方無敗だったという。それなのに、その伝説は自分が壊してしまっ



た。そして、その崩した奴と一緒に鬼神は酒を飲み、魚を喰らう。

その真意が分からなかった。

「怨んでなどおらん。友として認めただけだ」

「そうか……」

そんな二人を満月は何時までも見守り続けた。

## 鬼達の宴、開宴だ。

「おいおい、この前いなかったのもいないか？」

「当たり前だ、この前は人に興味など無いと言ってこないのがいたからな」

「あつそ」

どうも、薬師出雲だ。今日はまあ、あれだ。宴だ。ようは殺しあいつてことだ。あ、でも殺すのはルール違反なんだよな。

まあとりあえず宴のためにこの前の広場に來たんだが………。

俺の言葉にもあつたように数が確実に増えている。

「半刻後に開戦だ。それ以降は誰が何時どこで誰に仕掛けても問題ない。たとえその攻撃の対象が既にほかの敵と戦っているがな」

「じゃあチームで戦っている奴もあり得るのか？」

チームとは他から見では分からなくとも、取りあえず一緒に戦うかという奴はいるはずだ。

人間なら。鬼ならどうかは知らんが………。

「何人かはいらるだろうな。だが、基本的にこの宴は個人の力量を凶るためのものだ。数は少ない」

「………。じゃあ、乱戦か」

「ああそうだ」

面白そうじゃねえか。最初っから全開でよさそうだな。

「最後に会おうぜ」

「よかろう………」

俺と鬼神は反対側に向かって歩き出した。

「宴、開幕だああああアアア」

どこからか聞こえる鬼神の声と同時に全ての鬼が、自分の周囲にいるものに襲い掛かる。その中には老若男女の例外は一切ない。

どんなに年をとっているように見える鬼も、周囲の者に襲われたり、襲っていたりする。

「派手だねえ」

そんな中、周囲にたくさん鬼が居ながら、誰もが攻めあぐねている人間が一人いた。

そして、その人間も周囲にたくさん鬼が居ながら一切焦ったそぶりは見せない。それどころか楽しんでいるようにも見える。

「来ないなら俺から行くぜ？」

その人間の言葉に鬼達が身構えた瞬間、人間の前方にいた鬼が吹き飛んだ。

出雲は自分の前方にいた鬼を殴り吹き飛ばすと、右足を軸に回転するように振り返り、同時に右手をのばす。そして、右手には光が集まる。

「マスタアアアスパアアアアアク」

光は放たれ、先ほどまで出雲を囲んでいた鬼、さらには周囲で戦っていた鬼、総勢100名以上を一撃でのみこんだ。

「お疲れ様」

出雲は自分に向けて呟いた。

「あっちはすごいな」

「ほらほら、私達も始めようよ葉華」

周囲には、気絶した鬼が大量に転がっており、真ん中には二人の少女の鬼が服を軽くボロつとさせながらもほとんど無傷で立っていた。そして、彼女らも共闘していたわけではないらしく、相手に向けフアイティングポーズをとっている。

「ああ、どっちが勝っても怨みつこなし」

「相手を殺すもなし」

「手を抜いたら」

「絶交だ」

右手を限界まで硬くかため、二人は相手に殴りかかった。

「すごいものだな」

「ああ、すごいだろ？」

一人の鬼と、一人の人間がついに遭遇した。

## 二人の強きもの

「開戦といこうか……」

「ふん」

牙煉の体を紅蓮の雷と炎が包み込む。

相対する出雲の腕を風の渦が包み込む。

牙煉が音速を超えた速度で踏み込み、音速を超えた拳が出雲を捕らえるが、風を纏った腕にガードされる。

「終わりではないぞ」

「？」

牙煉はそのままさらに強く自分の腕に力をかける。

腕の紅雷と紅炎の密度が急激に上がり……

「紅の雷炎舞踏」

「!!!!」

出雲に遠慮など無くそれらは放出された。

そして、それらは容赦なく出雲を飲み込む。

「くっ」

出雲は、それに飲み込まれたまま、広場の外側にあった大木にぶつかり、大木をへし折る。

「ふん、これが我の本気だ」

紅蓮の雷炎を纏った鬼神はそう呟くが、その動きには油断というものが見えられない。砂埃を巻き上げその先が見えない大木の方向を見続ける。すぐにもう一度同じ技を放てるように構えたまま出雲が再び姿を見せるのを待ち続ける。

「マスタアアスパアアアアアアク」

砂煙の中から出雲の大声が響き、煙を貫き、光の束が牙煉を襲う。

「読んでなくとも分かる、その程度のこと」

再び紅の砲が火を吹き、光の束とぶつかり、拮抗する。そして、拮抗していたところが爆ぜた。

爆風は、再び砂煙を発生させる。鬼神の周囲も例外ではなく、砂煙に包まれた。

「……………来るか」

鬼神がそう言うと、また紅蓮の雷と炎の密度が上がり、構える。

「チエストオオオオオ」

砂煙を突き破り、日本刀を上段に構えた出雲が鬼神の上から飛び込んできた。

「あはははは。また私の負けか……………」

「今回は負けたと思ったよ」

2人の鬼の少女が揃って倒れていた。

服は既にボロボロとなり、体中に痣や擦り傷などが見られる。痛々しい状態ではあるものの、二人ともどこか清々しい笑みを浮かべていた。

楽しかったや、嬉しかった。

もしくは、ありがとうだったのかもしれない。

二人は同時に何かを言ったが、それは言葉にはならず、お互いに重くなつたまぶたを下ろした。

それが鬼の友情なのかもしれない……………

「むっ」

牙煉は自らの体に刃が触れるか触れないかの寸前で両手で刃をつかみ、体からそらす。

「……マジですか」

「ああマジだ」

牙煉は日本刀ごと出雲を背負投の要領でぶん投げた……。が、何度も同じように吹っ飛ばされる出雲ではなく、その先にあつた大木に着地する。そして、膝をバネにして再び牙煉に斬りかかる。

刃は牙煉に触れる前に振りきられ、風の斬撃が飛ぶ。

「ふんっ」

牙煉は右手の正拳突きで風の刃を砕く。

出雲は、牙煉から数メートル離れた位置に着地すると届くはずも無い突きを連続して行う。それは残像が発生するほど……。一つ一つの突きからは紫電が放たれる。牙煉を蜂の巣にせんとばかりの勢いで。

「さすがにこれは……」

牙煉もそれに対抗しようと連続して正拳突きを放ち、そこからは紅蓮の雷が紫電を相殺するべく放たれる。

しかし、牙煉は両手で手数を増やして防いでるのに対して、出雲は片手で日本刀を持ち、突きを放っている。つまりは出雲にはまだまだ手数を増やすことは可能である。

出雲のもう一方の空いている手に霊力が集まり、球となす。

7色の螺旋の弾幕が放たれた。

「ぐふあっ!？」

ついに出雲の攻撃はまともに牙煉の体を直撃した。

弾幕の雨は止むことを知らぬかのように吹き飛ばされた牙煉の体を容赦なく襲い続ける。

「ぐう……」

牙煉は、自分が纏う紅蓮の雷炎の密度を上げると、弾幕をそれで防ぐ。そして、両手を前に突き出す。

「紅蓮の二重奏」

紅蓮の炎と雷が捻じれ、編まれるように一個の巨大な砲となって出雲に襲い掛かった。

「……おいおい。大自然の怒り」

出雲も両手をかめはめ波を横にしたように前に突き出してそこから術をたたき出す。

中央に細いマスタースパークのようなレーザーが、その周囲には竜巻が。さらには周りに雷がまとわりついている。

牙煉の『紅蓮の二重奏』と出雲の『大自然の怒り』が拮抗する。

これは爆発などせず、力の全てが拮抗しているポイントから周囲に散らされる。

「……でやあああああああ」

二つの力はより強大なものとなってぶつかると。お互いの最後の力を全力で搾り出したエネルギーが空間にゆらぎまでも作り出す。

「ラストオオオオオオオオオオ」

すでにもう空になったと思われていた二人の力がさらにまし、ぶつかる。

が、突如その拮抗は崩れた。

ほぼ同時に牙煉と出雲は倒れた。

一瞬だけ先に……牙煉が先に……。



## 鬼たちの営み

「結局この山で一番強いのは出雲か」

「らしいな。葉華はどうだった？」

「四天王第4位だつて」

どうも、薬師出雲だ。一昨日の宴以来、序列が変わった。最後まで立ってたやつが強いってことなただけだな。

で、いつもどおり葉華の家で酒を飲んでいるんだが………

「なんでこうなった」

どうやら葉華の家を増築して、これ以降も同棲しなさいということらしい。

別に結婚したとかそういうわけじゃないんだけどな………。多分の話だが、この屋敷には四天王が二人と俺がいることになる。

俺が暴走すれば、鬼のメンツが揃うまで四天王が時間稼ぎ。もし人が攻めてくれば俺たちが防波堤といったところだろう。

まあなんともいい位置にこの屋敷もあったもんだ。ひとつの屋敷なのにたくさん役目を果たしてやがる。

あ、そうそう。鬼神にはまた牙煉がなつた。

俺は鬼じゃないから関係ないし………。

どちらにせよ、自由に使っていいらしいから土地は自由に使う。せっかく自然を使いこなせる能力なんだから畑でもやってみようと思う。一応野菜の種はもらってきたから、いつでもできる。俺は能力を使えば季節とか関係なく自由に作れるからな。だってその座標の気温変えてやればいいだけだし。

あ、でもビニールハウスみたいなのがあったほうがやりやすいんだけどな………。

まあ無い物ねだりしてもしょうがないから木で小屋でも作れば事足りると思う。

多分だけだな・・・・・・・・・・・・・・・・。  
ふう、しょうがないか。

「葉華、あっち側木を伐るぞ」

「勝手にしろ・・・・・・・・。まったく、お前が来てからというものいろんなものが急激に変わっていくな」

「いいことだと思え」

「そうでも思わなきゃ心がもたんわ」

「どうやら俺が言う前からそう思っていたらしい。」

「なら何と言おうが変わりはないか・・・・・・・・。」

「まあできたらうまい野菜を食わしてやるさ」

「・・・・・・・・。そちらの件は楽しみにしておこう」

花より団子・・・・・・・・か。

色気より食い気だな。

まあこのくらいの子供ならしょうがないか。

あ、でも俺も楽しみだからまだ子供なのか？魂は肉体に引つ張られるらしいが・・・・・・・・。俺は大体18〜19ぐらいのはずだよな？子供じゃないし。

そこが男子と女子の違いか？

そこまで重要なことでもないしどうでもいいか。さて、木を伐って小屋作って野菜を作るとするか。

「ふう、これでいいか」

小屋が4つ巨大な屋敷の隣に出来ていた。

それぞれが違う季節の温度になっており、擬似ハウス栽培を完成させている。

そしてなかには既に種まきを終え、既に野菜が芽吹いている。

ちよっとずるいが、能力で成長を早くしてみたのだ。もらった種の

数は少なめだったので、種を増やすための育成を始めた。というより最初からこれができると思ってたくさんはもらわなかったのだが……。

「お疲れ様」

「葉華……ん？ここ最近美月を見ないけどなんかあったか？」

この前屋敷に帰ってきたときも見なかったな。宴のあとのことな。

それ以降も帰ってきたところを見たことがない。

もしかして……。

「俺は避けられてるのか？」

「いや……。あいつなら鬼神様のところだ。にしてもなぜ美月のことが気になるのだ」

葉華は少し過剰とも言える感じで出雲に詰め寄る。

しかし、出雲は全くそんなことにも気がつかず杯を仰いだままその質問に答える。

「いや、一応は同居人だからな」

「そ、そうか……」

そんな葉華の様子を見ても出雲は結構友達思いだな、程度にしか感じていないのだが……。

「あいつは鬼神様のことが好きだからな」

「ぼふおおあつ、ゲホツゲホツ」

出雲は意図せずに聞いた鬼神の浮ついた話に、酒でむせ吹き出す。

そして、その噴射された酒は葉華の顔に直撃する。

「むぎやあああ」

葉華は葉華で女の子としてはどうなのかと思われる声を上げる。

「す、すまん」

「知るかあ」

バシィィ

こ気味のいい打撃音が出雲の頬から響いた。

## 暗雲漂ふ山

どうも、もう700年ぐらい生きている薬師出雲だ。  
あの時の宴から早いもんでもう50年。

人里は明治時代ぐらいまで発達している。

普通そんなに早く発達できるものなのかと思い、鬼たちに訊いてみたところ、盗み聞きをした結果から天才が俺がこの山にくる11年ぐらい前に生まれていたらしい。その娘は何でも銀髪だったとか・  
・  
・  
・

永琳じゃないよな？

バカだったし。

で、その娘は何十年も前から新しい物を作るのをやめたが、それとほぼ同時に新たな天才が生まれ、その数年後からその天才を中心に新しい物を作っているとか。

新たな天才は妖怪殲滅派で、昔からいる天才は妖怪共存派らしい。  
どちらも何十年も前から生きて一切老けていないとか。

盗み聞きによるとりあえずの情報収集によると、新しい天才は自身の能力で。

昔からいる方は薬を飲んでいる。

また、彼らだけでなく、人里の者たちが老けるのは人としてはともかくおそい。多分、長命なタイプの人類であり、人里の中に『時』、もしくは『歳』に干渉できる能力を持っている者がいると考えられる。

まあ、それはともかくとして、俺は今、人里とは逆方向の山の麓に  
来ている。

こっちの方には、山からそう遠くないところに大きな川がある。俺  
が居るほうは人里より遠くに行かないと大きな川がないんだけどな  
・  
・  
・  
・

小川というのにも値しない小さな水の流れならたくさんあるのにな。

それに、こつち側は妖怪がたくさんいる。見渡す限り、さらにはもつと遠くまで妖怪の領域だ。行ったことはないが、遠きに天狗の里もあるらしい。数だけなら鬼よりも圧倒的に多いものの、個々の戦闘能力は逆に鬼が圧倒的な強さを持つ。なんて聞いたが、それはあくまで鬼側の視点なんだから実際のこととは俺は知らない。

そんなことはどうでもいいとして、俺は麓の川で釣りをしている。一人じゃないぞ。鬼神こと牙煉も一緒にだ。1人でなんか寂しかったから昔釣りに誘って以来、牙煉が釣りにはまって逆に誘われるようになった。あくまで食べる分しか釣らないけどな。

でも、魚がかかるまでポーっとしたり、のんびりと牙煉と話したりするのが楽しいから飽きない。たまに葉華と来るところは問屋がおるさない。騒がしくなったり、どこからか（川からだけど……・）河童を連れてきて酒盛りを始めたりとやすらぎというものがない。その酒盛りで食われる魚は俺が釣った魚だ。まあ、食べないよりはましか……。

「なあ牙煉」

「なんだ？」

「お前好きなタイプの女性とかないの？」

ふと先ほど思い出した。そういえば美月ば牙煉のことが好きなのだ。だから手助けになりそうな情報でも調べとくか、と思い訊いてみたのだが。

「好みの顔とか性格は無いが……。しいて言うなれば体つきか」

「黙れ変態」

「誰が我一人変態だと？男など皆変態だ。お主とてわかるだろう。ボンツ、キュツ、ボンツ。だったか？最高だと思わぬか？」

「思わぬーよ」

牙煉ってこんなおかしなキャラだったか？

まあいいか。別にこれまでと大差ないし。

「で、お主はどうなのだ？例えば葉華あたりとか」

はあ、下手に話題を振ったら返してきやがった。

にしてま、葉華・・・ねえ・・・。

「美人だとは思っけどな」

「ほう、なら」

「結婚とかしないぞ。俺はもう700年近く生きてるじーさんだ。そういつた感情を永く一人で生活してきた影響で、俺は失っているし、葉華だって別に俺のことをそういつた意味では好いてはいまい」

「・・・・・・・・・・。頑張れ葉華」

「なんか言っただか？」

「何でもない。帰るぞ」

「はいはい、帰りますか」

2人は、能力と霊力、魔力や妖力を利用して空を飛んで山へ帰っていった。

「鬼神と思しきもの発見。人間と一緒に暢気に釣りをしていた、と。また、空を飛ぶことも可能。さて、こつちめ帰りやすか」  
羽を生やしたものが、書物を手に、山から高速で離れて行った。

## 空駆けし者と妖怪の王者

「出雲は居るか？」

「鬼神さま、出雲なら野菜小屋にありますが」

「そうか……」

「例の件ですか？」

「葉華は間が鋭いな」

「女子とはそういうものです。良いのですか？例の件に出雲を巻き込んでしまつて」

本邸の玄関口に二人の強き鬼が対峙している。とはいえ、争いではないので普通の会話をしているが、二人の顔は、鬼のよくあるおちやらけた感じは一切感じられない。それどころか少しピリピリしているようにも感じられる。

「あやつとてこの山の住人だ。そのうち巻き込まれるだろうし……。あいつが戦闘の爆音を聞いたまま黙つてられると思うか？」

「いえ……。それは、無理ですね」

「だろう」

ピリピリしていても笑を忘れない。それが鬼の信条なのだろうか？いつもと同じように多少は顔に笑みを浮かべる。

それでも何かが引つかかっているような不自然な笑みに葉華はなつてしまっているが………。

「野菜小屋だな」

「ええ、そちらにいなければわかりませんが」

「ふん、あの男は自由そのものだな」

『鬼神』牙煉はそれだけ言つと玄関から出ていく。

残された葉華と言えは……。

「私たちは大丈夫なのだろうか……」

どこかくらい表情を浮かべていた。

何かとてもひどいことを知つたかのような………。

「出雲っ」

春の野菜小屋に牙煉は扉を開けつつ、出雲を呼ぶが……。返事はない。どうやらここではないようだ、隣の小屋から声が聞こえたところから考えると、夏の野菜小屋にいるようである。

「まったく……。ここでとれた野菜はうまいがいざ訪ねてくるとなると面倒だな」

牙煉は徳利を持っていているわけでもないのに呟いていた。

「で、なんの用だ？牙煉。明日は例年の宴の日だろう。なにかルルが増えたか？」

ノックをして入ってきた牙煉が中を見ると、出雲は頬に土をつけたりしながら雑草を抜いていた。

「いや。出雲、問題が発生した」

「…………ふざけているわけじゃなさそうだ。何があった」

どうも、老体にムチを入れて体を動かしている（嘘）薬師出雲だ。小屋で気分良く雑草取りをしていたんだが、牙煉の邪魔を受けた。とかふざけて言ってるやうとか一瞬思ったが、こいつがまどついている重苦しい雰囲気からどうやらふざけている場合じゃないらしい。



鬼であるこいつらが、問題を俺に言ってくるということは鬼内部だけの話ではすまないということ。

つまりは、この山に何かがあったか、人里で何かがあったかのどちらかになる。

で、可能性的には……。

「人里がまた発展でもしたか？」

「違う。この山の問題だ」

……。そりゃあ、こっちにとつても死活問題だ。

人里の発展も同じだが、攻めて来られたときはいざとなれば逃げればいい。

だが、この山の問題となればそうはいかない。

でも山に何か起こったとは思えんし……。

「ほかの妖怪でも攻めてくるのか？」

こっちは逃げるわけにはいかないからな。妖怪の種族の序列が変わってしまう。

今は鬼が負けなしたから最強の地位を手に行っているが、戦わずして逃げでもすれば一番下にでも落ちるだろう。

序列が上ならば堂々と土地を歩いてられるが、したならば隠れていなくてはならない。

奴隷のように扱われる場合もあるからな。まあ、鬼に対して、相手が一人であったとしてもほかの妖怪がそんな扱いできるとは思わないけどな。だって死ぬし。鬼に殺されるから……。

「ああ、天狗の大集団だ」

「おいおい、そりゃまたずいぶん大きな勢力が来るもんだな」

天狗の勢力……。

鬼に次ぐ力を持った勢力と言われている。

個々の力では鬼に負けると言われるが、数は鬼が1000ちょっとしかないのに対して6000以上はいるらしい。

また、天魔と呼ばれる天狗最強の王者は鬼神にも匹敵する力を持つ。大天狗と呼ばれる10名は鬼の四天王と匹敵するとか……。

。 「明日の宴に参加すると、我々が勝てば山をよこせと言ってきた。 どうやら我らこの山の最強は我だと思われているらしくてな。 我に書状を送りつけてきたが、おぬしの方が強いからな。 一応知らせには来たぞ。 あとはおぬしが山を去ろうが戦いに参加しようがしなかるうが自由だ」

「……………。 その場になって決める。 野菜、持っていくかい？」  
「いたどころ」

『鬼神』 大雉牙煉は野菜を片手に自分の屋敷へと帰っていった。

翌日……………

「出雲は来なかったな」

「葉華…………。 しょうがないよ、あいつは人間だよ」

大量の妖怪。 鬼と天狗が対峙していた。

しかし、鬼の側には河童の姿は見られるが、出雲の姿は見られない。

「葉華殿、美月殿。 そろそろ始まりますぞい」

二人の四天王の裏から年老いた鬼が声をかける。

「「じい様。 すいません」」

「大丈夫じゃ、我ら四天王がおれば勝てるわ。 あんな軟弱妖怪共などな」

どうやら、この老人も四天王の一人らしい。

あとひとりには、鬼神の横で瞑想をして浮いているが……………。

「開戦っ」

鬼神の一声で二つの勢力はぶつかった。

天狗って意外と強いもんだな

ズドオオオオオ  
バゴオオツオン  
パアアン

随分と派手にやってるもんだなあ………ここまで音が響いてくるよ。

あ、どうも、山の中でも年寄りに含まれる薬師出雲だ。

今年の宴に天狗が乱入しているせいで、いつも以上に賑やかな戦いになっているみたいだ。

いつもも派手な戦いにはなるけど、音が違うからなあ………。

天狗の技か？興味はあるがまだ行く気はねえよ。雑魚がまだまだたぐさんいるだろうし。あ、でもさっさと行ってマスタースパークでまとめて倒すとかも良さそうだな。よし、じゃあ野菜小屋と屋敷に結界張り終えたらさっさと行きますか。

出雲はせつせと野菜の小屋に、そして屋敷に結界を張っていた。

結界は、よほど強力らしく、時折枯れ葉が当たると『ビシッ』と強い音を立てて弾いていたが………。

………聞いていた話と違うぞ。

何かずいぶんと天狗が強くないか？

数は聞いていた話と変わりがないけど、倒れている鬼の数がおかしい。

もう、半分ぐらい倒れていやがる。

それに対して、地で倒れている天狗は300程度………。

ああ、そうか。それだそれ。鬼は、空を飛べる奴が少ないが、天狗

はみんな空を飛ぶことができる。だから空からほとんど一方的に攻撃を仕掛けているのか。結局、鬼の攻撃は基本的に素手や武器。ある程度以上に強いのは、妖力で弾を作って撃てるけど、それもすべての鬼ではない。

天狗は、空からの攻撃で妖力を利用して葉っぱをナイフのようにして地の鬼に弾幕を作って攻撃する。

もし、天狗が地上にいたらいい勝負どころか、鬼が押しただろうが、これじゃあむりだ。

早く来て運が良かった。

のんびりしていたら敗北して住むところを追われたとか言っても情けないしな。

別に前の住処に戻ればいい話だから俺はそんなに困ることではないが、鬼たちには借りがあるし・・・。

よっしゃ、一発景気づけに撃ちますか・・・。

出雲は、両手を前に突き出し、かめはめ波を横にしたように構える。両手の中央に、光が集まり始め・・・。

・・・。

「マスタアアアスパアアアアアアアアク」

宙から一方的な攻撃をしていた、天狗の群れに直撃した。

それこそ1000や2000は超す数に。

「マスタアアアスパアアアアアアアアク」

一方的な攻撃を受けていた私たちの頭上を青白い極太の光が貫いた。そう、この技は出雲がよく多用する技。

つまりは・・・。

「出雲が来たぞ」

鬼神さまが私たち鬼の士気を上げるために声を張り上げる。

きた、圧倒的な攻撃を受けていた私たちにも反撃のチャンスが……

「大自然の怒り」

再び出雲の声が響き、風の渦が空中の天狗たちを襲う。風が渦を巻いているせいか、かわきったと思われる天狗や、射線上以外の天狗も吸い込まれて、電撃にあたりたり、中の光に当たる。

『これなら勝てる』

鬼たちの勢いは再び強くなる。

空にいる天狗たちが恐怖を感じてしまうほどに……。そう、もともと天狗たちは、自分たちには空からの攻撃というアドバンテージがあったので勝てると思っていた。

鬼たちは基本、拳で戦うからだ。

なのに、今は空中にいると謎の砲撃を受けて一発ごとに1000や2000落とされている。

だからといって受けられないために陸上に降りれば鬼の餌食となる。

将棋で言えば『詰み』の状態であった。

しかし、ひとつだけその『詰み』をくつがえす策がある。

簡単だ。砲撃を行なっているものを倒せばよい。

ならば誰が倒すのか？

いっぺんにあれだけの仲間を落とすことができる砲撃を近距離で受けることになるのだ。足がすくまないわけがない。いくらどれだけ強いものであったとしても、恐怖は感じるのだ。

天狗たちが硬直している間にも、次々と砲撃が放たれ、意識を奪われていった。

そして、天魔の決断が広場に響く。

「陸に降りろ。一方的な砲撃を受けるぞ」

天魔の声で天狗たちの硬直はやっと解けたが、既に数は1000をきっていた。

1vs1って時間がかかるから面倒くさくね？

「貴様か、あの謎の光を放っていたのは」

どうも、マスタースパーク大好きな薬師出雲だ。

調子に乗って撃っていたんだが、どうやら敵さんの大将、天魔に目をつけられたらしい……。はあ、めんどくさいことになってしまったもんだ。

俺は端っこから鬼たちの援護をしているだけのつもりだったのにな。。。

1vs1より、1vs多数の方が得意だからなあ。まとめて倒せるし。

こういう状況なら2vs2とかのほうがいいんだが、まあ無い物ねだりしてもしょうがないか。

「俺だよ、天魔どの」

「ほう、ならば我らが一族の敵を討たせてもらおうか」

「いや、殺してないから」

「その程度の小さなこと我前には関係ない」

。。。。。。自己中心的タイプか。これはまた厄介なこと。というかもしこれに勝つても来年からどうするんだろ。どうせ天狗も宴に参加するだろうから上位は天狗が多くなる気がする。

まあ、そんなときなつて考えればいいか。。。。。。。

「出雲、そいつは我に譲れ」

「牙煉か。。。。」

牙煉まで来ちゃったよ。

あとの流れはだいたい想像つくなあ、強い奴らがここに集まってこら一帯が周囲よりひどい戦いになるって感じだろうな。

はあ、面倒くさい。

「お父様、その人間私に譲ってくれないかしら？」

おい、一人増えたよ。

それもかなり強い奴。多分このまま行くと俺の想像は……。

「出雲、邪魔だ。私がやる」

「そ〜だそ〜だ、私たちがやるぞお」

「おい、葉華はともかく美月は酔ってんだろ……」

駄目だこいつ等、美月とか巨大な徳利持ったままだし。にしても良  
くこれまで徳利が壊れなかったな。

それは結構大きな謎だ。

「出雲や、わしらは鬼じゃ。よつていようが関係ない」  
「ム」

はい、きました。鬼の四天王は勢ぞろいです。そして、天魔の後ろ  
には、10匹ほどの天狗が降り立ってきて……。

「天魔さま、お手を煩わせるほどでもありません。我ら大天狗が  
やりますゆえに」

大天狗襲来……。

うざい……。

ああ、うざい……。

ああ、邪魔なんだ。

俺の目の前にいる連中が……。

「どいてろ、こいつらは俺が潰す」

出雲の霊力が大量に放出され、鬼たちは吹き飛ばされた。

「来いよ、一人ずつでも全員まとめてでも」

たった一人の人間に、天狗の最高峰の戦闘力を持った集団は、一瞬  
ではあつたものの気圧された。

そう、たかが一人の人間に。

「私から行かせてもらうわ。お父様もみんなも手を出さないでね」  
しかし、それでも戦いをやめることはない。

彼らは既に歩を進めているのだ。ここまで来て止まるわけにはい  
かない。

さいは投げられたのだ……。

「一人か、俺の名前は薬師出雲、お前は？」





マスタースパークとは比べものにならない威力と、大きさを持った光が黒天を飲み込まんと迫る。

「だからいけないわよ……」

黒天はそう言っていると風を自らの周囲に展開しようと操ろうとするが……

「風が、操れない!？」

風は操れず、完全に光に飲み込まれた。

## 高火力コンビ

「調子に乗るからだ。お前の能力じゃ俺の能力との相性は最悪だからな……」

そう、黒天の能力は風を操れた。

しかし、出雲の能力は自然そのものを操ることができる。

圧倒的に黒天の方が不利である。最初に自分の能力を明かさなかった出雲も多少えげつないが……。

「さて、次は誰だ？」

出雲は、自分の手にフツと息を吹きかけると次はお前だと言わんばかりに天狗たちを睨む。

すると、人間に負けていられないということだろうか。天魔が

「我がやろう」

名乗りを上げる。

すると、黒天を上回る妖力を確認できていた大天狗のひとりも同時に前に出る。

既になりふりは構ってられない。

たった一人の人間に種族が敗北したなど妖怪たちにとって屈辱にも程があるからだ。

「何人同時でも関係ない、かかってこいよ」

出雲がそう言うとお天狗が妖力の弾を飛ばすが……

「何一人で暴れている」

鬼神の妖力弾ではじかれた。

そして、ここに山の頂点二人と、天狗の頂点二人が対峙した……



中だけで……。火柱はドームの天井に当たると方向を変えて彼らを襲った。

「危ない、咄嗟に能力の応用を思いつかねば死んでいた」

「牙煉の能力ならいけると思ったから使ったんだけど……」

「他人に先に自分の能力の使い方気がつかれるとはな……」

「普通はこんな状況はないだろ」

火柱が消えたあと、未だに煙が漂ってはいたがひとりの鬼と人間は軽口を叩き合っていた。

正直、かなりひどい攻撃だっただろう。

ただの炎の攻撃ではあったが、温度は太陽の炎にも近いものであった。

さらに、牙煉が自らの能力で、自分の周囲のものを天魔たちのもとに送りつけていたから実際に予定されていた以上の量の炎が天狗のコンビに襲いかかったのだ。

温度の方は出雲が異常なぐらい早い速度で自分たちの周囲だけ下げていたが……。

「死んだか？」

「我は知らん」

「あつそ」

二人は、自分たちの攻撃を受けた者たちが死んでいてもおかしくないと判断していたが、

「物足りないからもう一発撃つか」

「今度はおぬしが合わせる」

容赦がない。

彼らは戦いが好きなのだから。

いや、戦いというものは好きではないのかもしれない。ただ、自分

たちの邪魔をしたものが気に入らなかった。だからそいつらを潰す  
ことが気分が良かったのかもしれない。

かみなりやま  
「雷山の紅葉景色」

牙煉の周囲に四つの紅蓮の雷がまとわりつく炎の巨大な玉が4つ顕  
現する。

「炎か……。炎の円舞曲」

出雲がONEPIECEのロビのように腕をクロスさせると、手  
からぼんっぼんっ、とたくさんの小さな炎のたくさんの玉が現れる。  
それらは巨大な巨大な4つの炎弾に螺旋状にくっつく。

そして、牙煉が右腕をふりかざし、振り下ろしたと同時に4つの玉  
が煙の中に飛び込み、4本の火柱を建てた。

## 鬼の祝い事、派手に行こうぜ。

どうも、薬師出雲だ。

いやあ、この前の天狗騒ぎは大変だったな。あんだけ高火力の攻撃を浴びせたにもかかわらず、天魔も一緒にいた大天狗も生きてた。で、天魔も負けちゃったから天狗たちは降伏を宣言。

べつにそんなに悪いやつじゃないってことが分かって、今じゃ鬼と天狗は打ち解けている。というか天狗たちが山に移り住んだ。

で、サブタイトルからも分かる祝い事の席っつーわけだ。それも『鬼神』大雉牙煉のだ。

なんともまあ、鬼神と美月が結婚するわけなんだが……。

牙煉の屋敷でかいな……。……。

葉華と俺と一緒にいる屋敷もかなりでかいから山最高ぐらいかなって思ってたらもつとでかいし。

鬼が約250人、天狗が約100人、カップが約50人ほど広間に入ってる。

全員呼びたかったらしいが、さすがにそれは屋敷に全員入りきれないので、泣く泣く今の人数で断念したとか……。

いや、充分多いから。

それに、この事実は公表なので、今は山のお知らせで祝いの宴会が行われている。

理由付けして宴会をしたいだけだろうが……。

「にしても、牙煉、お前が結婚つてなあ……。ぷっ」

「おい、出雲。我に対してそれは失礼だと思わんか？」

上座に牙煉と美月。下座の一番前に俺、左は葉華、正面には天魔、その横には黒天。まあ、そんな構図からズラーズラーとたくさん妖怪が並んで酒を飲み、料理を食べる。

で、俺は丁度よく、牙煉の近くの位置にいるため、牙煉をイジリ放題というわけだ。





結局美月に殴られてその場は治まった。  
ずずずずずぞ。

「落ち着いていればそうもならないのに、仕方がないかしらね」  
黒天は一人味噌汁を飲んでいた。

## 薬師見聞録 『1』

薬師見聞録、古の雄大なる自然の章。 著 薬師出雲 太聖葉華・

・・・・・・・・・・・・・・・・

（現代語訳より一部抜粋）

恐竜が平原を駆け巡り、弱者を喰らう。

どこにでも見られる風景。

春は花が、新芽が生え色とりどりに染まる。木々は力強く、天高く  
目指して伸びる。鳥たちは新たな生命を抱く。

夏は日が照り、草木が青く染まる。植物が実を成し、我ら命に新た  
な喜びを与える。

秋は夕焼けを眺めながら酒をあおる。山々の木々は色鮮やかに染ま  
る。まさしくこの世の楽園のように、誰もが目指す理想郷のように  
・・・・。

冬は命が姿を隠す。強き者たちも活動を抑える。弱きものたちは来  
年、また輝きを見るために暗闇の深くへ。

鬼たちは酒を年中飲み、宴会を続ける。

かといって、何も他にしないわけではなく、先頭の訓練を行なつた  
り、急激な発展を続ける人里の監視、妖怪たちの統率。その他にも  
様々なことを行なっている。

天狗たちは鬼に巻き込まれ酒を飲む姿がよく見られる。

彼らは、鬼との戦いに敗れ、今では山の警備を行う担当にもなっている。彼らの空中での戦闘能力、及び速力は素晴らしいものがあり、未知の土地の探索に向かうこともしばしばある。

河童たちは河に佇み、山に登っていることは少ない。

彼らはあまり強い力は持っていないが、ほかの妖怪のほとんどが持っていない特性ゆえに重役になれたという。

山にやって来た時には既に天狗以外の構図は出来上がっていた。

そのため河童についてはあまり詳しくことを我は知らない。

「出雲、何書いてるんだ」

「あ、葉華。返せ」

「見てから返す。……ふーん、こんなことを書いていたのか。私については書かれていないな。お前についても。私が書いておくよ」

「いいから返せ」

この書を書くものは薬師出雲。

人間でありながら鬼の頂点である『鬼神』大雉牙煉を幾度となく下している。

さらには、自然を操る能力を持っている。その影響か一切歳をとることがない。また、自然の化身のような存在にも捉えられる。妖精たちも、彼を前にするとイタズラをしない。つまりはそれだけ自然に愛されているのだ。

長生きしているため、霊力や魔力が半端ではない量を有する。

鬼神を下した技も魔力を大量に束ねて発射する技であった。名を『マスターパーク』と冠している。

彼についてはここまでにしておこう。

勝手に彼の書いていた書物に私、『太聖葉華』たいせいようけっかが記す。

誠に勝手ながら私についても書かせてもらう。

私は薬師出雲の同居人である鬼だ。

能力も一応持つている。どうやら鉄を操ることができる。が、私の戦い方とは合わないから戦闘時に使ったことは一度もない。笑いものだな……。

まあ、これでも鬼の四天王の一人だ。

これぐらいだな、今のところ書くべきことは。

……。

我々の住む山から南へ10kmほどの位置に人里がある。

そこに住む者たちは、二人の転載を中心に急激な発展を続ける。

この前まで弓という武器を使っていたかと思えば、今度は銃という武器を使い出す。

拳句の果てには動く箱だ。

妖怪と彼等の間には過去に起きた事件により深い溝がある。

こちらとしてはいつ攻めてくるかと怯えていなくてはならない状況だ。はた迷惑である。

事件については少々前の方を読み直して欲しい。

人は、まあ、我も人であるが……。

怨みの感情で動いている。

忘れてはならない。

人は、そしてすべての妖怪、生き物は怨みだけでは生きていけない。

そこには喜び、悲しみ、幸福、絶望、様々な感情がなくては生きていけない。

それがひとつだけになったとき、内側からその存在は崩れていくだろう。

どす黒いものに……………。

何よりも黒いものに……………。

存在意義が怨みに縛られ……………。

自らの世界を破滅へと導くことになる……………。

自然を操るものだからこそわかる。

人は自分たちの力だけでは生きていけない。

忘れるな、そこにはもともと自然の力があつたことを。

なくすな、自然を敬つ心を。さすればいつのまにか幸せになれる。

## 開幕、人妖大戦

「？人里の動きが慌しい？」

「ああ、物見の天狗が言っていた。なんでも武器を持った連中が慌ただしく動き回っているそうだ」

.....

あ、どうも、長年独り身の薬師出雲だ。ここ最近じゃ仙人なんて呼ばれるようになってきた。

。近年生まれたような若い鬼や天狗たちにだけだな.....

教師に向けてなんてことを言うんだか。

「私も見に行ってみたわ。暇だったし。彼らの言うとおりだった、盗み聞きもしてみたけれどあの様子じゃ山に攻めてくるわよ」

「マジかよ。.....、寺子屋はしばらく休止だな」

せつかく寺子屋始めたのにな。この山教育機関というものがないし.....

だからまあ、兵法から戦い方。文字、計算、自然、歴史について教えていたんだが案外ここの住民は本当にのみこみが早い。

ちよつと教えるとおつという間に覚えている。

こっちが気づかなかつたことに彼らが気づいたりしている。

寺子屋の場所は屋敷だ。実戦訓練の時以外は屋敷で、実戦訓練の時は広場で訓練している。

「彼女もいたわよ」

「永琳が？」

「ええ、武器を持った人たちをものすごい形相で睨んでいたわ。一人の男が近づいて彼女の顔に触れようとした瞬間に殴り飛ばされていたけどね」

おいおい、何やってんだか。多分その男つてのがもう一人の天才なんだろうな.....

「どうするんだ？ 私たちなら勝てないことはないだろうが……。彼らの新兵器がな……」

そう、人里が急激な発展を遂げた副産物とでも言うべきもの、兵器の発展。

銃が連射可能な武器になっている。それに威力も半端ではない。射程距離も長い。

「どつちにしろ迎撃はしなくちゃならないだろう。黒天、人を貸してくれ、迎撃設備を整える」

「人間の出雲が行動するのは皮肉なものだな」

「あら、彼にとってはその程度の事関係ないのでは？ いいわ、貸してあげる」

ともかく時間がないな。

武器を持っていたことが分かっているのにこつちに来ないとなるなら、どこかで訓練をしていると考えるのが一番。

普段は戦い慣れていない者たちも付け焼き刃だとしても確実に戦闘を覚えてくる。

さてさて、どうしたものやら。

近接の武器なら戦い慣れていないものなら恐怖を感じてまともに戦えないんだけど、遠距離武器なら関係ないからな。相手が遠くにいるぶんだけそういうものを感じにくくなる。相手が接近戦メインの敵ならなおさらだ。

「そうそうそこに櫓、そつちにはもつと高く塀を積んで。堀はもつと深く。そこには水も流すから内側に壁を作つて」

厄介だ。

天狗だけじゃなくて力のある鬼の人員も借りている。

堀と堀は既に5重にしている。異常なぐらいの防御陣。これですら防ぎきれるかどうかは定かではないのだから……。

強度は俺の能力でなんとかなるけどそれ以外はどうしようもない。はあ……。高さとかは俺じゃ変えられないからな。

「上流の河童たちに連絡、河をこつちつなげるように。それと川の水はまだ流すなよ」

「了解しました」

ひとりの天狗が河にいる者たちへと伝令に飛ぶ。

着々と迎撃体制は整ってきている。あとは人員の配置。

どこに人を配置するかが関わってくる、どうしたものやら……。

同じ種族ばかりを固めても敗北する、違う特性を兼ね揃えた部隊を構成しないといけない。

「前列は天狗メインかな」

「物見から連絡があつた。永琳殿から密書だ」

「むちゃするなあ、ありがとうな葉華」

さてさて、なんと書かれているやら。

「お元気ですか？出雲。私のあとを継ぎ、人里を発展させている男がいます。彼は次々と新しいものをつくり、人々に思想を植え付けています。「人間こそが善、妖怪は悪」と……。気づかれていますでしょうか、彼らは山を攻めようとしています。それは明日か明後日と思われれます。あなたがたが防御体制を整えているのは彼らも気づいています。それでも計画に変わりはないでしょう。すぐに防御を固めてください。私は残念ながら何もできませんが、あなたが



生き残ることを祈っています。そして、あなたの仲間となった妖怪たちも……八意??。失礼、八意永琳より』

「……。全員迎撃体制に移れ」

「来るのか、ついに……」

「私も前にはなくてはならないわね」

「悪いな、葉華、黒天」

翌日、人間が山へと攻め込んだ。

何も戦い方に決まりはない。

「第一防衛ラインに敵が攻め込んできた模様です」

「了解、第一防衛ラインからみんなを下げて」

「はっ？」

「いいからいいから」

さあ、攻めて来い。攻めれば攻めるほど不利な状況に陥るぞ、人里の者たちよ。

知恵が知恵があるほど悔やむことになるぞ。

俺の策略はそうだったものだ。

本当の狙いは黒天や葉華程度しか気づいていないだろう。牙煉すら気づいていなはずだ。普段俺の周囲にいる奴しか気がつくことは出来ない。

いや、寺子屋の奴らなら気付くことができるかもしれないな……

伝令のやつも困るな、これじゃあ。

「前線の葉華なら意図を理解してるからそのまま伝えて」

「了解しました」

つとと、忘れてた。どうも、鬼畜なことを考えていた薬師出雲だ。

敵には容赦はしないぞ、情をかけたらその分だけ隙を疲れる。守る側は有利になれるがそれは守る側の人間がしっかりとしていればの話だ。

さてさて、奴らはどう出るかね……。

「撃て、撃ちまくれ。壁をぶち壊せ」





「早くやれヨ、里に使いヲ出せ、梯子を持ってコさせる」  
「わ、分かりました」  
「ははははは。」

始まるよ俺たち人間ノ世界ガ……。

「敵は第一防衛ラインを越えてきました。第二防衛ラインで迎撃体制を整えています」

「くるか。壁を登ってでも……。第二防衛ラインは下げさせて。」

全防衛ラインから第三防衛ラインに妖力弾を撃てる者を集結させてくれ。河童たちには上空に赤い光が上がったら。と伝えてくれ」

「……了解しました」

「信じる。勝てるぜこの戦」

ああ、勝てる。ことはうまくいっている。勝てるさ……。

全てはこの手のひらで踊っているにすぎない。

第三防衛ライン

「奴らが第二防衛ラインを登りきつたら同時に可能な限り連射しろ」

「……了解」

「鬼に負けてるんじゃないわよ、遠慮なくぶちまけなさい」

「……応」

第三防衛ラインに葉華、黒天は鬼と天狗の半分近くを率いて来ていた。

ここで敵のほとんどを叩くために。

『登れー。あとちょっとだ。ここまで何も無いんだ。こんな壁た

だのお飾りでしかないんだ。さつさといけえ』

正面からは敵の声が聞こえてくる。

つまりはもうすぐそこまで敵が来ているのだ。

そして……、最初の人が登りきった。

「撃て（撃ちなさい）」

妖力弾と鉄すらいともたやすく斬れる木の葉が雨のように降り注いだ。

『グワツ』

『て、敵だああああ』

『構わん、登れ。登り切り次第銃を撃て』

葉華は心の中で軽く笑みを浮かべる。

そんなもの策とは言わない。

無策で攻めて来るなんて自殺願望も過ぎると……………。

「なかで何やってんだよ部隊長たちは。やられまくってルのかよ」  
人の軍の全体を指揮するものは壁の中に入ることはなかった。  
各部対ごとの隊長たちに任せて……………。

「そろそろいいな。第三防衛ラインを放棄、赤の妖力弾を葉華に上げさせて」

「了解しました」

さあ、この戦も最終局面だ。

これで僕たちの勝利は決まる。勝負はついた。



## 10年後の話

今行くと

あなたは言った

あの桜

花びら散る頃

世界は巡る

行けるだろうか

あの山の向こう

灰に世界が包まれる前に

みんながいなくなる前に

世界が残っている間に

あなたが生きている間に



「勝ったか」

「ああ、まあな」

勝った。けどこちら側も損害はゼロじゃない。

幸いにも死者はいなかったが負傷者が38人。人里の軍隊の壊滅よりは損害が少ないと思うが……。

「……………」

「出雲、私の勝手な予想だが、彼らはまた来るぞ。そのときに軍師たるお前がそんなんでどうする」

「ああ、そうだな」

そうだ、俺の采配にみんなの命がかかってるんだ。

失敗すればみんなが死んでしまう。

ああ、分かってるさ。

俺は落ち込んでいられない。次にまたやつらが来る時は武器も新しくなっているはずだ。それでも勝たなくちゃ成らない。じゃなきゃみんなの命が灯火を消しちまうからな……………。

10年後

「牙煉、茶でも飲んでいけ」

「いらんわ」

「あつそ」

ふう、落ちつかねえな。なんとなくだけど。

嫌な予感がする。何でだろうな、なんかざわざわする感じって言うか……………。

「じゃあな。また明日会おう」

「あ、ああ。嫌な予感がする。気をつけて帰れ」

「ふん、その忠告受け取っておこう」



「お前たちは小屋から出るなよ」

出雲は小屋の中に毒ガスが入らないように注意してから、春の野菜小屋に入り寺子屋の生徒と葉華、黒天に声をかけていた。その数およそ30人余り。

「はい、せんせい……」

いつもと何かが違うことに生徒たちも気付いているのかどことなく、くらい声になっているが、出雲は振る舞いを変えることはない。

「葉華、黒天。絶対に小屋から出るな。俺はすぐ戻る」

そういうと小屋から彼は飛び出た。人里の方へと向けて走り出す。

彼が山を走れば走るほど、死ぬ間際になったと思われる妖怪たちが見られる。出雲自身は、能力で空気を浄化させているのだが、さすがに広範囲にそれを行うことはできない。

「くそっ……」

ふざけるな、こんなのありかよ。

許さない、絶対に許さない、彼は走ることを放棄して大空へと飛び出した。

そして、彼の目に入ってきたのは山へと押し寄せる人間の軍隊だった。

進むべき道は最後の道

臆するな

前だけを見て進め

諦めるな

最後の最後まで

突き進め

己が信じる道を

目を瞑るな

真実を見届ける

さすれば道は切り開かん

歩んでいくべき道が……………。

見えるか

先へと続いていく

長い長い階段が

上りきれ

夢を叶えんがために。

「よお、ここから先は通さないぞ」

「な、なんで人が？い、いや、妖怪のはずだ」

人間の軍隊は自分たちの前に人間が現れたことに驚いていた。

これまで受けてきた教育には、里以外には人間は一人もいないという事を言われてきた。

だというのに、自分たちの目の前には一人の人間がいる。

「妖怪じゃないさ、俺は人間だ。………だけどな、俺はこの山で生活してきた。おまえらは俺たちが何かしたわけでもないのに突如として攻めてきた。前は俺たちも迎撃が何とかできた。今回はなんだ？毒ガスか。俺がここに来るまでもたくさんの妖怪たちが瀕死の状態になっていた。お前らは何がしたいんだよ、どんな生き物だって同じ命なんだよ」

出雲は自分に向けて武器が構えられていてもいつもと同じように、いや、いつも以上にしゃべる。

彼が思っていたことを目の前のたくさんの存在に向けてぶちまける。「くっ、我々には関係ない。妖怪などという穢れた種族はこれからの時代に必要はない。全員、撃て」

指揮官がそういった次の瞬間、彼は宙を舞っていた。

そして、一瞬前まで彼が立っていた場所には、出雲が立っていた。

「ひっ」

「ああああ」

「指揮官っ」

「うわああああああ」

頭がつぶれればまとまりがなくなる。軍隊は一瞬で崩壊した。

各人の思い思いの行動が取られ、出雲を撃ち殺そうと銃弾を放つてもかわされ、味方に当たる。逃げようと思ってもパニックに陥っており、逃げることもままならない。

そして、彼に近いところにいるものから宙を舞うことになっていた。

「死にたくないやつは失せる」

「……ひいひいひいひい」

そこからの行動はいくら崩壊した軍といっても素早かった。

とはいえ、全体がたまたま同じ事をしたというだけだったが……

言わずとも知れたこと、崩壊した軍は人里へと全力で逃げていった。

「追うか……」

ああ、いくさ。何人山の連中が生き延びているかは分からない、でもまだ生きているやつらもいる。

さっきの連中が援軍を連れてもう一度攻めてこないとは限らない。だったらまだ生きているやつを一人でも多く生き延びさせるために人里の軍を本当に壊滅させる。それしかないさ……

「出雲……、ひとりで行く気か」

出雲の後ろから聞きなれた声が響く。

鬼たちの頂点の

「牙煉……、無事だったか……」

よかった、本当に良かった。牙煉が生きていればまだ山は建て直せる。

「……？天魔は？」

「おい、天魔や美月はどうした？」

「生きとるわ」

「勝手に殺さないでよ」

「天魔・・・、美月」

彼らは無事だった。しかし、一つだけわかっていることがある。ここにいる四人は出雲を除いて皆が毒を吸ってしまったために寿命がだいぶ削られている。

明日にでも死んでしまいかもしれない。さすがに出雲といっても既に体内にめぐってしまっている毒を消すことはできない。出雲の行える空気の浄化は毒の無効化ではないからだ。

「ほとんど毒ガスを吸っていないもの達は河より向こうに送った。それ以外のものたちはこれから人里を攻める。どうせ死ぬのならばめて華々しく散りたいといってな」

「・・・そうか。うちの屋敷にいた葉華、黒天を含めた37名は野菜小屋に入ってもらっている。あの小屋は壊れることもなければ燃えることもない。結界も張ってきたから毒ガスが中に入る心配もないしな」

出雲の言葉を聞くと天魔と美月が顔を緩ませる。

天魔は自分の娘が無事なことを、美月は自分の親友が無事なことを知ったから。

「お前ら行くぞ。もう皆が人里に向けて攻め込んだようだ」

「そうか、じゃあ行くとしますか」

「いつでもいいよ」

「ふん、最後にド派手な花火を見せてもらうことにしようか」

四人は人里に向けて飛び出した。

## 戦場というひとつの舞台には様々な思惑がある

「急ぎなさい、月へ行くロケットは順次発射するわ。乗り遅れたものは置いていくわよ」

人里の中心部では、永琳たちを中心に前々から行われていた事業があった。

『人類の月への移動』

妖怪に襲われて一度は壊滅状態に陥った。

しかし、だからといってすべての妖怪を敵とみなすわけではなく、自分たちのこの里を襲ったクマ妖怪だけを恨んでいた者たち。そんなものたちは鬼などに戦争を仕掛けるのは反対だった。

そのため、戦うことを選ばず、住む場所を変えることを選んで地球にいたら、どこに行っても妖怪は居る。

だったらすぐそこにある月に住む場所を変えたらいいじゃないか。こういう思想を持った者たちは少なくなかった。それは自分たちがクマ妖怪に襲われて大事な人を失った悲しみを知っていたからだろう。彼等妖怪だって感情を持って生きている。

何もお互いにしたわけでもない無関係のものたちを殺すのには抵抗があったのだ。

だが、すべての人がそういう思想を持っているわけではない。

妖怪は悪、人間が善。そう思っている者たちは軍に入っていた。

そして、手当たりしだいに妖怪を狩る。

周囲の妖怪を狩り尽くし、ついに山へと攻め込んだ。ただそれだけだったはずだったのだ。

今回はそれで軍が壊滅した。

今回は毒ガスという化学兵器を使うことによって妖怪を壊滅状態にして攻め込む予定だった。だが、鬼や天狗が本気でキレてしまい、逆に攻め込まれ始めている。街の外周で銃声が聞こえるほどに。

「急いで、死にたくなければ急いで」



永琳は叫ぶ、少しでも多くの人間を月に送るために。

人里の中に今いる者たちの多数が妖怪共存派、もしくは中立だった者たちだった。その考えを持った者たちを妖怪に殺させてしまつては本当にどうしようもなくなる。

「八意様、第一ロケットから第五ロケットまでが発射します。また住民の80%がロケット内への堆肥が完了しており、30分後には全ロケットの発射が可能になります」

「わかつたわ、あなたも急ぎなさい」

「八意様はいかがしますか？」

「私は最後のロケットに乗るわ」

「了解しました」

「……………、行つたわね……………。急いで、もう間に合わないわ」

人里の外側で1000mクラスの火柱が建つた。

「悪いな、先に仕掛けたのはお前らだ。終焉の紅炎」  
ラスト・プロミネンス

出雲の前方の人の軍隊の中心にプロミネンスが発生する。

その豪炎は当たり前だが人々をチリ一つ残さず焼き尽くした。

「行け、最後に花火を上げるぞ」

出雲の号令に後ろにいた妖怪たちがプロミネンスの範囲外だつたところ  
紅炎にいた軍隊に襲いかかった。

「……………悪いな、永琳。お前だけでもせめて逃げられるようにする」

消え入るような小さな声で彼はつぶやいた。

命の恩人へ向けて。

「あつちは出雲か、さすがは火力最高峰とでも言うべきか……。  
我らも行くぞ、紅蓮の二重奏」  
一匹の鬼が紅蓮の炎と雷を降らせた。

「ふん、馬鹿どもめが、無粋な単色花火をあげおつて……。  
我が鮮やかなものを見せてやろう。これまで使ったことがなかった  
が虹色の（じゆうしきかぜ）颯」

七色の妖力弾がランダムに混ざりながら扇状に広がりながら風のように滅茶苦茶な軌道で前方の軍に降り注ぐ。

「鬼如きに遅れを取るなよ」  
天狗たちが最後の花火をあげんと猛攻を仕掛ける。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
轟音を響かせながら待機を切り裂いてひとつの円筒状の塔が地を離  
れる。

それに続くように二本目、三本目と次々塔が飛んでいく。  
上空に見え始めた月へと向かって……。

「行ったわね、あとは5機のロケット。4機は行けるけど最後の1  
機は……」

一人街の外側をむいて仁王立ちしていた永琳の背中に冷たいものが  
走る。

それは冷や汗などではなく、

「何しているんだい??？」

「チツ……」

背中に突きつけられた銀色に輝く刃の影響だった。

「舌打ちとはひどいね、だから」

さあああ……

銀色の刃が体に入り込む。

「くっ……」

痛みを感じないわけがない。背中を切られているのだから……。

「ははははは、俺をさつさと認めないからだ。知ってるぜ、お前

が不老不死なことくらい。だからいくら斬ってもシナインダモン

ナア？」

ザクツ

「があ……」

永琳は背中を光宗によって深く斬られた。

「どこだ、永琳。もう逃げているならそれでいいが……」

出雲は先に人里のなかに入り、命の恩人たる人物を探していた。時

たま、逃げ遅れた人を見つけると、自分の能力で速く走れるように

し先を急がせる。

そして、自分は再び命の恩人を探し出す。先ほどからこれの繰り返し

しだった。

「死んでないといいがな」

外へ出ていなければ死んでいることはほとんどありえないだろう。

しかし、多数流れ弾が人里の中にも飛び込んでいることに出雲は気

づいていた。

だからこそ探しているのだ。

そして……

「あ、いた。えい……り……ん？」

彼の目に写ったのは背中から先決を飛び散らす八意永琳の姿だった。

そして、その後ろには血をたらす刀を構えた男の姿が……

「永琳っ」

彼はなりふりを構わず飛び出していた。

行つけええええええええええ

出雲は再び永琳に刃を突き刺さんとしている男に飛び蹴りを食らわせる。

あくまで本気で蹴ってはいない。一切の妖力を感じられないところから種族が人間であり、大して防御力もないと思っただからだ。

そして、案の定その男は簡単に近くの民家の壁へとたたき付けられた。

「久しぶりだな、永琳」

「あ、ああ、え、出雲？」

「そのとおり」

その言葉を聞いた永琳はペタンと地面に座り込んだ。

「つとと、永琳怪我は大丈夫なのか？」

出雲はその重要な案件を忘れていたことを思い出し、永琳の背中を見ようとするが、

「平気よ、私は不老不死だから」

「はっ？」

「不老不死になれる薬を造って飲んだのよ。ついでにさっきあなたが蹴飛ばしたのが軍の最高指令にして人里の指導者。いわば私の敵対者ね」

永琳の敵対者、すなわち妖怪殲滅派の総司令官である。

10年前に大規模な攻撃を仕掛けてきたのもこの男。

軍を使って山に毒ガスを降らせたのもこの男。

追撃といわんばかりに軍を送り込んできたのもこの男。

すべての黒幕がこの目の前でうめいている男の仕業なのである。

「殺してもかまわないわ、彼がいなくても私たちは生きていける」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうか」

出雲が何かを考えていることに気付いたのか、永琳は彼につぶやく。

「今殺すか殺さないかは別としてお前はもう行ったらどうだ？あの

飛び去った円筒状の塔は月を目指しているのだろうか？お前が乗り遅れたら誰が月を仕切るんだ」

「それもそうね、でも私がいなくてもみんなは大丈夫よ。みんなをまとめられる人材は何人もいるもの、でも。今回は私も行かせてもらうわ」

「さつさと行け」

出雲は自然を操る能力だからこそ一つの事に気付いていた。今から天気が劇的に変わると………。

「お前のせいで発射が遅れるぞ」

「じゃあね、出雲。また遭えることを願っているわ」

「ああ、またな」

こっちだって不老不死なんだよなあ、と心の中でつぶやいた出雲は永琳を見送ると、先ほど蹴飛ばした男を見る。

いまだに痛みがせいかわめいており、仲間たちがこんなやつに苦しめられたのかと思うと憎しみの炎が揺らめく、そして………

「消える」

出雲の手から放たれた光線で男の頭が失せた。

「これで、終わりか………」

人里の周囲で打ちあがっていた色とりどりの花火はもう見られない。

「出発するわよ」

「はいっ」

八意永琳は部下に最後のロケットの出発を告げる。

つまりは自分たちのロケットの。

「八意さま、風連尺さまが乗られていないようですが」



「くっ、ここまで来て……」

永琳自身はたとえ機体があぼろぼろになって地面に墜落しても生きていられる。しかし、他の乗員たちにそれは不可能だ。墜落すれば簡単に死んでしまう。

どうにかならないものかと外を見たときだった。

一つの黒い陰がロケットと併走するように飛んでいる。

「て、天狗？そんな、こんな時に」

「いえ、違うわ」

永琳の目には天狗でないことが一瞬で判断できていた。

まず翼が無い、それに……

「出雲が来た」

黒い陰が大きく腕を振るとロケットの前方には黒い雲の中につえまで貫かれたトンネルができていた。

「いまよ、全速力で雲を抜けなさい」

「は、はい」

ロケットは可能な最大速度で雲を突破すると、数分後、月にたどり着いていた。

出雲の姿は多数の乗客、及びに乗員によって確認されていた。



それぞれの歩む道（前書き）

古代編最終話です。どうぞ……………。

## それぞれの歩む道

出雲は歩く。人里の街中、たくさんの人や妖怪が死んでいる中を。

出雲は歩く。人里の外、激戦地となり大地が陥没している所を。

出雲は歩く。力尽き、笑みを浮かべたままぬくもりを失った最強の鬼とその嫁の横を。

出雲は歩く。力尽き、鼻にかけたような笑みを浮かべたまま死んでいる最強の天狗の横を。

出雲は歩く。人里へつく前に力尽きてしまった妖怪たちの屍の中を。

出雲は歩く。毒ガスによつて無残にも命を奪われた山の妖怪たちの中を。

出雲は歩く。毒ガスのこもった山を。

出雲は歩く。生徒と葉華、黒天の待つ小屋へと……………

出雲は強く張られたままの結界の前まで来ると、自分の体に浄化をかけて毒ガスを追い払い、自分だけが結界を通り抜けられるように再設定しなおす。

そして、彼は結界をすり抜けた。

中に入ると……………

「……おかえり、先生」「……」

「……おかえり、出雲」

小屋にいて助かったみんなが笑顔で彼を出迎えた。

「ああ、ただいま……………」

最大限、自分にできる笑顔で彼はそれを受け入れた。

夜、子供たちが皆寝静まった頃。出雲、葉華、黒天の三人は秋の野菜小屋にいた。

「そうか、父上は亡くなられたか」

「悪かった、助けることができなくて」

「ふ、別にそういう意味で言ったわけじゃないわ」

「鬼神さまも美月も私を置いて先に逝ってしまったか・・・」

「ごめんな」

「気にしなくていいさ」

三人は談笑などとは程遠く、とても暗く、重苦しい話をしている様で、いつものような明るさが一切見られない。その顔はまず子供たちが見たことの無いほど真剣で、重苦しかった。

「これからどうするかだ。時折俺が外に出て確認するが最低でも10年は結界の外にみんなは出ないほうがいいだろう。それぐらい毒が濃い。牙煉や天魔たちが言うには河の向こうに生き残っている者たちがいるそうだから俺はそいつらも望むものはここに連れてこようかと思う」

「かまわないわよ、べつに」

「私もそれでいい」

「じゃあ次だ。外に出れるようになったときにどうするか、だ。俺は悪いがちよつと旅に出る。お前らはみんなを率いていく必要があるがどうする？」

「お、おい。正気か？」

珍しく葉華が戸惑う。

出雲が抜ければ、鬼神や天魔に代わってみんなをまとめていける存在がここにはいない。

本当に彼が山を去るのであれば、とはいえ葉華と黒天もみんなで山から移動することを考えていたようだが。まあ、この集団から彼が

抜けてしまえば大変なことになることは間違いが無い。

「葉華……。黒天、天狗をまとめられるか？」

「出雲、誰に向かつて言っているのかしら？私はある天魔の娘よ。」

二代目天魔ぐらい簡単にこなしてあげるわ」

「そうか……。葉華、お前は二代目鬼神だ。お前が鬼を率いなくでどうする」

「そ、それもそうだが。黒天、お前はそれでいいのか」

「私はかまわないわよ。これまで色々とまかせつきりにしてきたからね。休暇ぐらい上げてもいいんじゃないかしら？」

黒天は葉華の戸惑う姿を見て思う。

本当に素直じゃないんだから。。。。。。。

そして、出雲を見て

この鈍感め。。。。。。。

彼女が思ったことは間違っていないだろう。

「うう、分かった。出雲、お前がいなくなった後は私が引き継ぐ」

「よし、決定。じゃあ寝るか」

できるだけあかるくそう言うと、彼は小屋を立ち去った。

18年後

「ここに我ら三人歩みを別つ。されど何時何時いつかたどでも誰かが助けを求めた時はそのものものとへと助けに向かうこと此処に誓う」

「元気でね、出雲。あんたはいくら強いといっても人間なんだから」

「黒天こそ調子に乗って怪我をするなよ」

「どついう意味よ」

「はははははははははは」

「ふん、葉華はすぐに転ぶ気がするから気をつけなさい」

「え、本当か・・・」

げっ、という顔をした葉華はどうしたものかと後ろにいる鬼たちを見ると皆がそのとおりだと言うように顔に笑みを浮かべていた。

「くっ、出雲。死ぬなよ」

「誰に言ってるんだよ」

出雲がそういうと、三人の間に静寂が訪れる。

そして、彼らは桜吹雪散る中杯を傾け、酒を飲み干す。

三人はお互いの顔を、そして葉華と黒天に付き従う鬼、天狗、河童たちの顔を見回す。

「友よ、また会おう」「」

三人は別々の方向へと歩き出していた。

それぞれの歩む道（後書き）

次は『神々の戦国編』へ。

## あたらしい居場所

どうも、もう何年生きているのか分からない薬師出雲だ。

ここ何年かの話だが、山の一箇所の土地に定住していたら周囲に妖怪たちがたくさん集まり始めた。俺が畑を育てていたら急に襲いかかってきたやつらを撃退したところ、なんか部下にしてくださいきなりのそのまま居着いてしまった。

しかし、なかには普通に居着いている妖怪たちもいる。

たとえば……

「玲奈、お前はあつちの訓練しているやつらを抑えろ、畑が吹っ飛ばす」

「俺が？なんで俺が……」

俺口調の靈鷲山玲奈。あくまで女だ。人型で刀の付喪神、紅いポーターにきりつとした切り目が特徴だ。

俺の周囲にいる中では多分俺の次ぐらいに強い。葉華や黒天よりは弱いと思うけどな。

「相変わらず荒れたまんまだね？」

「お前は後ろから急に現われるな」

こいつは伊呂波美奈。玲奈の相棒らしい。青緑の髪に緑の目。こっちは鏡の付喪神で能力もち。光を屈折させることができるんだとか。おかげで知らない間に後ろにいてビビったことも多々ある。

「この里は何時までもつのかな？」

「いやなことを言うな。俺の気がすむまではもたせて見せるさ」

「ふーん、何時までなのか興味があるかな？」

語尾が必ず疑問系のところは多少気になるがこの際無かったことにするしかない。

「まあいいよ、そうそう、見回り役の子が言ってたけど近くまで人が来てるって？」

「そうか……」

そう、ようやくとでも言うべきか、地上に再び人が現われ始めた。此処にいる妖怪たちの少数がむかし、今の月の民が地上にいた頃に生まれた妖怪。そして、大半が新たに生まれたばかりの妖怪集団。とはいえ、基本的に武闘派ばかりのため、全員が全員戦闘訓練を行っておりけっこう強い。

「来たら来たときにどうにかするか……」

「そうだね？」

はあ、もし狙われるとしたら畑だろうな。

あの畑は俺が自分で育てている畑だけど広大だ。だから遠くからでも見ることができる。

食料が群生してると思っただけで食べられるよな。

「畑が吹っ飛ぶだろうがああああ」

「すいません姐御おおおお」

「……」

ふう、強いな。玲奈は。

今度戦つてみたい気もするが、やめておくか。土地がただではすまない気がする。それにある程度一方的な試合になるしな、下手にいつの自信を砕かない方がいいだろう。

そうそう、玲奈と美奈は月の民がいた頃に生まれた妖怪だそう。

だから玲奈は姐御、美奈は姐さんと呼ばれていることが多い。

で、強い。だからこんな場面はよくあるのだ。

だが、何度見てもなれないものだ……。

「美奈は見回りの連中に回数を増やすように言っておいてくれ」

何時人が来るかも分からないからな。

せめて何時来るかくらいはしておきたい。だからこそ見まわりの数を増やす。

この妖怪の里、には500ぐらいの数があるんだからちょっと増やしたところで変わらないけどな。

「いいよ？」

疑問文のような返答。



どうにかならないものか……………。

「あつちの山にたくさん野菜が生えてますよ村長」

「行きましようよ」

「このままじゃ餓えて死ぬやつも出てきますよ」

「じゃがな……………」

とある林の中、何十人も人間は顔を合わせて会議を行っていた。議題は近くに見える野菜のたくさん生えている山に移住するかしないかという話。リーダーとごく一部の者を除いて、みなその意見に賛成だった。

反対派としてはなぜそんなところに群生しているのかが分からないし、なぜか生え方が整っているということから何らかの妖怪の罠、もしくは誰かのものということではないかということからだった。

「誰かのもの。笑わせないで下さい。あんなにたくさんのおいしい物を独り占めですか？俺たちが餓えて死ぬというのに断れますかね」

「む、しかし、それでわしらが殺されても文句は言えんぞ」

「大丈夫ですよ、おれたちにゃ、おきゆうさんがいるんですから」

「私は反対なんだけど……………」

「おきゆうさんそんな堅いこと言わずに」

反対派の方がこの集団の重役は多いようだ。

しかし、賛成派の方が圧倒的に多い。

そして……………

「指揮権は康介に授ける。山に行くぞ」

山に行くことが決まった。

出雲が待ち受ける山に。

あたらしい居場所（後書き）

新編スタートです。

あ、今日誕生日だった……。

## 盗人たちがやって来た。

どうも、もうそろそろ一億ぐらい生きている気がしないでもない薬師出雲だ。

今現在、山の妖怪たちは玲奈、美奈を除いて隠れさせている。妖精たちはかくれると言っても聴かなかったけどな……。

まあ、理由は簡単だ。

ただの人間だと思っていたやつらが山に入ってきて、畑を荒らそうとしている。

最初は何人が畑の周りで防御させるか、なんて考えていたんだが、中に一人ものすごく霊力が高い少女がいる。多分の話で言えば、この集団を守る陰陽師のようなものだろう。

で、余りにも霊力が強すぎるので、相手の戦闘力が未知数。下手に弱いやつが前線にでて死なれても寝覚めが悪いので強さのランキンGTOP3で迎撃することに……。

まあ、とりあえずは、畑を荒らすまでは様子を見る。荒らさなければ存在を無視するが、荒らして勝手に食べたりすれば攻撃に移るという流れだ。

「すぐに攻撃はするなよ、俺がとりあえず話をするから」

「めんどくさ、大体なんで俺が……」

「はあ、私も今日は乗り気がしないよ？」

「……なにこのゼツ不調の状況は。」

あれか、紫色の丸い顔がため息ついている状態か？

あ、何かわからない？あのパワプロの好調とか不調とかの状態表示のやつの絶不調のマークだ。

「まあ、ともかくとしてさっさと殺すのはなしで。と言うか殺すな」

「わかったよ、ったくよなんでこんな気が乗らない日に限ってめんどくさい事態になるんだか」

「いつも以上に荒れてるよ？」

知らないよ、なんでこんなにも不調なんだか。

「……………、そろそろ来るぞ」

出雲の目が急に真剣なものになり、それにつられるように玲奈と美奈の目も鋭くなる。

山にいる妖怪たちのほとんどが妖力を隠している。全員ではないのは、逆に全く無いと怪しいからだ。

そして、出雲たち三人も霊力、もしくは妖力を自分にできる最大限で隠している。

だから、多分人からは畑の真横の林に強者が隠れているだなんて夢にも思っていないはずだ。

「あ、あつたぞ。あそこだ」

「おお、凄いたくさん」

「すげえ、こんなに広大な範囲に……………」

「みなさん待つてください。なんかあつた時のために私の近くにいてください」

老若男女の人の集団が出雲の畑へとたどり着いた。

そして……………

「だれも近くにいないし食っちまおうぜ」

「お、おう。そうだ。誰かが育てているものでもなさそうだぜ村長」

「……………」

「大丈夫だって村長、もし誰かのものだったとしても主人が帰ってくる前に逃げればいいし、いざとなれば殺せばいい」

……………いい度胸だな本当に。

というかうすうす感づいてるんだろ、ここが人が育てている野菜の集まりだったことに。

「……………じゃ、食おうか……………」

何人かの若者が畑に入り、野菜を手にとろうとしたときだった。

ズガン

そんな音とともに、畑の真横の畑から強大な一つの霊力と、二つの妖力が人々の集団に重圧を与えた。

そして、何人かはその重さにパタンと座り込んでしまっている。

「いい度胸だ、人の野菜を買ってに食べようとするなんてな」

「あーあ、大將がきれちまった」

「はあ、なんでこんなことをしたのかな？山で訓練している妖怪たちが怒るよ、自分たちの競争に大將が八つ当たりで混ざってきたって？」

林の中からゆっくりと三人が姿をあらわした。

## 格の違いを見せつける

「っ、皆さんは下がってください」

一人の少女が他の人々をかばうように前に出ると、それに呼応するかのように入々が逃げるようにして少女の後ろに回る。何人かの若い男が投げ槍やら何やらを構えて、それを投擲する。

「美奈」

「はい、こつというのは私の担当です？」

美奈が手を出すと銅鏡がいくつか現われ、投げ槍を防ぐ。

「警告だ、俺たちの畑を荒らすな」

出雲が霊力を放出しながら言うが、顔に笑みを浮かべている人物が何人かいる。

ろはいえ、それには基本的に共通点があり、全て若い人ということだったか……。

「おきゆうさんがお前みたいなの妖怪に負けるわけ無いさ」

「妖怪が食い物を独り占めするなんていけねえな」

「命乞いをしろ」

「俺たちが餓えるんだ、妖怪なんて知ったこつちやねえ」

……。

警告はしたよな？

ああ、先ほど俺は警告をした。

しかしそれをこいつらは聞かないと……。

まあ、何人かはヤバイな、って顔をしているがそいつら以外は完全に気が付いていないな。

でもさすがと言うべきか。おきゆうといわれているらしき俺の正面の少女は力が圧倒的に差があることに気付いている。それ以外のやばいことに気付いているやつらもそこまでは気付いていなさそうだ。

「警告はした。お前らはそれを聞き入れなかった。ただ、それだけだ。それと一つ訂正しておく、俺は人間だ」

出雲がそこまで言うと、重圧に耐えられなくなったのか、おきゆうが空中に靈力で浮きながら色とりどりの弾幕を作り上げる。

出雲がそちらを睨むと、出雲の周囲に多数の魔方陣が現われる。それらからは、一発一発が人間にとっては致命傷となるような光線が放たれ、色とりどりの弾幕を相殺する。

「玲奈」

「ったく、なんでいつもこうなるんだか……」

出雲の後ろに控えていた玲奈が出雲の右手を握る。すると玲奈の体が光り始め、光が体を完全に包み込み形を変える。

日本刀の姿へと。

出雲は日本刀の切先をおきゆうに向けると、先端から拳一個弱ぐらいの距離に魔方陣が現われる。

「マスタースパーク」

少しいつもより細めの光線がおきゆうをまるごと飲み込んだ。

「おきゆうさんっ」

「そんな」

「なんで、あんな……」

「え、嘘だ」

人々の間に絶望に近いものが広がる。頼みの綱であったおきゆうが死んだ。

それはつまり次は自分たちが殺されるのではないか。

しかし、自分たちには目の前にいる強い存在と戦うすべは無い。抗うことはできても瞬間的に全滅するのが理解できていた。

「もういいぞ」

「はいよ」

今度は日本刀が光り、先ほどの逆再生のように玲奈が現われる。

そして、玲奈が口を開いた。

「甘いね大将も、なんでころさなかつたんだ？」

「野菜が血をかぶるだろうがアホ」

「ああ、なるほど」

二人は、お互いの顔を見ながら会話をしていた。二人の話を聞いていた人は、おきゆうがまだ生きていることに安堵し。

すっかり聞いていなかったものは、この隙になんとかして倒そうと武器を構えたが、リーダーに屋やめさせられていた。

そして、この集団のリーダーが出雲の前に出て、地にひざをつけ、額を大地にぶつける。

「申しわけございませんでした。我々も食料が無く餓えていたのでせめて若い者たちを生かしたかったです。此度のこととはわしの命でみなのご勘弁願えないでしょうか」

みごとな謝罪であった。

しかし、それも仕方がないことである。

かつてに人の育てたものを食べようとしていたのだから。

そして、身勝手にもそのあるじを殺そうとした。

「何のことだ？」

だが、今の出雲にそんなことは関係ない。出雲の中では様々な考えがめぐっていた。

「勝手に食べようとしたのはあいつをぶっ飛ばして気がすんだ。手前一行の野菜は食べていい。そのかわり山のふもとに定住するのが条件だ」

「ほ、本当ですか？ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。おい、みんな。それでいいな」

「……………いいです」「……………」

出雲の策謀は巡る。

単純に、妖怪ばかりの山だったら、今回のようなことも妖怪が相手だからという理由で起こるだろう。しかし、相手が人だったらどうだろうか？

まったく起こらないとはいえないが、妖怪相手よりは少ない。

そして、妖怪は人の技術の恩恵を受け、人は妖怪の力という加護を受ける。



お互いにとって利益があることなのだ。

さらに、出雲は人が妖怪とともに生活することを考えてほしかった。もう二度とあんなことが無いように。

また、妖怪は長い年月を生きるからこそ気づかないこともある。だからそれを人間とともに生活することで気付かせようと思ったのだ。

こうして、山のふもとにちいさな村が一つできた。

その村は、薬師出雲の能力によって、大規模な自然災害などを受けられることも無く、野菜は通常よりひとまわりも、ふたまわりも大きく生長した。

そして、新たな野菜も生み出されていった。

## とある山の御話

「ここ近年だけどさ、靈力とは違う何かができきたんだが、何か知らないか？」

「俺が知るわけ無いだろ。自分のことぐらい自分で分かれ。あ、そうそう、外部の妖怪がまた入山して登録していったぜ」

「うーん、もしかしたら神力かもしれないよ？人里でなんか大将が祭られてたよ？」

どうも、なんかみなぎってきた薬師出雲だ。

ここ最近では山のことが有名になり始めて、外部から妖怪が入れてくれといってくるようになった。

頂上にある神社で登録をすれば誰でも番付に参加できる。

人であるうが妖怪であるうがたとえ神であろうがだ。

黒靈峰なんて呼ばれている。なんでも遠くから見ると黒くみえる山で、靈力がみなぎっているからだそうだ。

ついでに、頂上の神社で祭られているのは何故か俺だ。この山のルールの一つで、番付に加盟したものは人間を襲われない限り殺してはならないということがあるからか、人間もよく山で見かける。

そんな彼らがしつかりした住処を、といってとんでもなくでかい神社を造った、平成の世に残っている出雲大社なんて比じゃないぜ（笑）。なんでも人間だけじゃなく妖怪も協力して造ったそうだ。

嬉しいものである。神社の裏は妖怪たちの番付表があるが……

「まあ、そんな悪いものじゃないんだな？」

「多分だけどね？」

「俺は知らね」

「………、せいっ目潰し」

「目がアアアアア目がアアアアアアアアアア」

「玲奈、ム 力になっちゃだめだよ？」

こういつた普通の日常もいいものだな。

心が安らぐといつかなんと云うか………。まあ、コタツ+みかん+談笑だからよけいに安らぐ。

このコタツ、電気とか火とかなしで俺の能力で音頭を調節しているぶんだるいが……。

「おおおおおん

「鐘の音が」

「鐘の音だね？」

「鐘の音だ」

「おおおおおおん

やっぱりいいな、今年から12月31日から1月1日にかけては鐘を鳴らすように言ったら本当にやってってくれるよ。

「寝るか？」

「寝るの？」

「まじか」

こうしてまた一年が終わるのである。

のんびり、のんびりと。

長い年月を生きる妖怪だからこそ物事をゆっくりと落ち着いて。

ボーっとしながら先を見据えた生活をするなんて事はなく、そのときをのんびりして過ごすだけ。

妖怪たちの年末であった。

だからこそ、こののんびりする大切な日は山では稽古が禁止されていた。

ゆっくりと、一年間の疲れを取るために。

もともと、冬の時期であるがために冬眠している妖怪や妖獣たちも少なくないが……。

そして、春が来るたびにこの山はにぎやかになる。

妖怪の数もわずかが増える。

そして、動物の数が極端に増えるのだ。

出雲は妖精、動物から自然の力を繰るがゆえに好かれている。

そして、そんな彼のもとには様々な動物たちが集まっていた。

## 増える人間

どうも、どうやらここ最近神になってしまった出雲だ。

なんだかんだ言っても、やっぱりこれまでどおりの生活をしているんだけどな。

あ、でも今では人里にちよくちよく顔を出して、よその妖怪から襲われたりした情報が入った時に討伐に向かう。そんな流れになってきている。

しかしまあ、こんだけ武闘派ぞろいのこの山に喧嘩を売ってくる勢力もあるもので、時たま妖怪の軍勢が攻めてくるも、あっさりと山の麓付近であっさりと全滅したりしている。

「で、今日は何があった・・・」

俺はいつもどおり人里の集会場に顔を出しているわけだが、代表格の顔が多少厳しい。

「薬師様、よその村が我らのもとに入りたいと言ってきました」

ああ、なるほど。

そいつらが入ってくることによって村の情勢が変わることを恐れているわけだ。

「特に問題はないと思うがなんかあったのか？そんな厳しい顔をして」

「え、ええ。彼らはとても軍事力が強大でして、もし彼らが我らを追い出そうとすれば簡単に我らは追い出されてしまうのです」

・・・、そりやまた厄介なところが。

可能性としてはあまりにも巨大な集落になってしまったために全員の腹を満たすことができなくなり、この山の話聞いて仲間に取り入れてもらおうと考えたということだ。

これまでも、小規模な集落が吸収されて麓に住んでいる者たちもいる。

されど、今回はどうやらこれまで集まってきた集落の合成体を1と

みたときに、3ほどの大きさであるらしい。

「いざとなれば妖怪たちが降りてくる。それでどうだ？最初っから疑ってかかっても、後後普通に集落に入りたかったただだとすればいざこざが起こるぞ」

「されど……、分かりました。いざとなれば妖怪たちは我らの見方をしてくれるのですね？」

「ああ、通達しといてやる」

「ありがとうございます」

さて、用事はひとつ終わり。

あとは……。

ふう、さすがに妖怪に襲われないとは言ってもこの山は老人たちにとっては厳しい箇所もあるかもしれない。だからこうやって薬草の採取を引き受けたりする必要性も出てくる。

それに、今俺がいる中腹の森だって妖怪たちが木々の中での戦闘を行なっているはずだ。

流れ弾が飛んでこないとは言い切れないだろう。

「ま、たまにはこうやって歩き回るのもいいことか」

普段は歩かずに空を飛んでいることが多い分だけ、足腰を動かすことに気分が良くなっている出雲だった。

「で、どうやら大規模な集落がうちの山のお膝元にやって来る。彼らがどういう行動をとるのが今ひとつ不明のため、これまでいた住民たちに危害を加えるようであれば、彼らを追い出す。そうでなければこれまでどおり。異常だ」

「「「「「「「「「「」

神社の部屋の一つで妖怪の代表者たちに一応のことは伝えたが、さてさて、どつなつとやら……。

## 神としての話

どうも、半人前神様の薬師出雲だ。

つい先日、新しく入ってきた集落の連中と、これまで居た連中のちよつとした揉め事が起こり、それを仲裁したらなんかさらに信仰が増えてきた。

気持ち悪いぐらいに神力が増えまくる。膨大な量の霊力＋豊富な魔力＋鰻登り中の神力、普通にあつてもいらない量だ。

ために魔力と霊力の5割を込めてマスパ撃つたら山がひとつ吹き飛んだ。

うん、ヤバイね。

「で、今度は何なんだよ」

俺は神社にしながら人の依頼を受けていた。

これまでのように人里を歩くのもいいが、広い上に以来が多い。だから、山の上の神社に依頼書を持つてくることで、依頼板に貼る。

そして、一定以上の番付のものがその依頼を受ける。

そういうシステムにすることによって、増えた依頼量を裁くことに成功しているわけだ。

しかし、そちらでは対処できない様なものは直接俺のほうへと持つてくることになっていくわけだ。

「それが、よその土地の神様というのがありまして、信仰しなければ息子を殺すといつて、いま私めの息子が高熱にうなされているのです」

「祟り神か………」  
祟り神。

神の一種であり、名前のとおり祟りを扱うことができる。たとえば、嫌いなやつがいて、そいつに怪我をしろと念じればその後大怪我をするといった感じだ。

妖怪として強大な力を持って生まれたものが、そのうちに神として



信仰されるようになった場合、祟り神になるものもいる。種類としては直接戦闘向きの力を持っているわけではないが、もともと妖怪だった場合は、もともと強大な力を持っていたことをあらわし、ものすごい強い存在であることが多い。

しかし、あくまで神であるため、神としての活動も行える。例としては土壌の質をよくしたり、ご利益を与えたりといったところだが……。

ともかく、飴と鞭という言葉をそのままにあらわしたような存在の神である。

そして、今回は出雲の勢力圏内の者にまで信仰しろという命令、つまりは鞭を使ったのである。

「しょうがないか、これ以上被害を拡大させるわけにも行かないし。取り合えずお前の息子の熱を下げて健康な状態に戻したら売られたけんかを買いに行く。それでいいか……」

こうして、出雲の次の暇つぶしは決まった。

「あ、ありがとうございます、ありがとうございます」

男が涙を流しながら出雲に謝礼を言うが、

「お前の息子が治ってからだ。それまでは謝礼なんか要らない」  
静かにそれをなだめる。

そして、立ち上がると、

「じゃあ、お前の家にまで行くか」  
男を連れて下山し始めた。

## 神としての仕事

とある民家にて……………

「うつ、はあはあはあ、うわあ……………」

「これは……………」

「ええ、息子の現状です」

出雲の目にはたいへんな状況であることが一瞬で読み取れる。

いや、出雲ではなくともだれであってもそれに気付くだろう、気付かなければ逆におかしい。

その少年の体には黒い蛇のようなあざが巻きつくようにできており、あざでないところも、ところどころ赤くただれている。

それが、今回出雲が相手をする必要のある祟り神の力をあらわしている。

今回のときは単体としてはこれまで戦った相手のなかでも上位の敵であることを……………

「治せなくは無いが時間がかかる。お前には多少待っていてもらう必要があるが？」

「かまいません、息子を治してただけるのであれば何でも致します」

「そうか、じゃあはじめようか」

出雲は手のひらに霊力と少量の神力を集めると、少年にあてがう。

出雲の手のひらは、黒いあざの上に行くとも明るく光り、それ以外の場所ではおぼろげに光る。

光が黒いあざを照らせば照らすほど、少しずつだがあざが薄くなっていく。

局地的に黒いあざが消えると、そこを埋めようということなのか、周囲のあざの端が生き物のようにウニョウニョと動くが、出雲がそ

こに液体のような光をかけるとあざの動きが止まる。

そしてまた、それを周囲のあざで行う。

これを何度も何度も繰り返していき、少しずつではあるものあざは確実にその姿を消していった。

「ふう、あざは終わったか……」

出雲は、すこし気を抜いて、息を吐く。

さすがに長時間集中力の要る作業を続けるのは肉体的にも精神的にも共に疲れるようだ。

また、普段なら体力の回復に使われる霊力や神力を使った細かい作業をしている。一見楽そうに見えるのだが、実は言うところ、流し込む量が多ければ正常な肉体にダメージを与えてしまうことになり、量が少なければ、効き目が無いどころか逆に餌のように霊力や神力を使われてあざという祟りが強化されてしまう。そんな綱渡りをしながら針に糸を通すような作業を行っていたのだ。肩もこり、目にも痛みが走っていた。

しかし、まだただれている部分と、体の内部に異常がある。

体の内部は見た目では分からないので見逃してしまう可能性が高いものだが、出雲の能力をごまかすことはできない。体内にも異常があることは最初に判明していた。

「よし、後ちよつとだ」

出雲は自分にはつばをかけると再び作業についた。

先ほどとは違い、今度は一箇所一箇所やるのではなく、全体に腕をしならせるようにして霊力と神力を振り掛ける。少年にかかったそれらは、何も無いところではどこかに消えるが、ただれているところでは中に吸収されて、だんだんとただれている肌が元に戻ってくる。

そして、それがわからないぐらいまで治ると振り掛けることをやめる。

「水を持ってきてくれ」

今度は、依頼をしてきた男に水を持ちに行かせると、少年の現時点での容態を確認する。

すでにうめいたりする声は無く、普通にスースーと寝息を立てているのだが、時折からだのどこかに痛みが走るらしく顔をしかめる。

「もって来ました」

「よし、と。水を………」

もってきてもらった水に霊力と神力をわずかに混ぜると、未だに目を覚まさない少年の口を強引にあけて、霊力と神力の混ぜた水を飲ませる。

「あとは多分もう大丈夫だ。ご飯を食べ終わった後に必ずこの水を飲めば再びあざが出ることも無いだろうからしっかり飲ませること」

「本当にありがとうございます。おかげで息子が助かりました」

そんな男の声をBGMに出雲は民家を立ち去り、山の頂上の神社へと帰っていった。

けんかを売ってきた近所の祟り神を倒すための準備をしに……

## 神々の戦争

「今回は玲奈が留守番役で美奈が100ほどつれて俺と一緒に祟り神のところに行く。いいな」

「留守番かよ」

「わかったよ?」

あ、どうも。ちょっと仕事を済ませてこようと思っている薬師出雲だ。

これまで興味がなかったから、近隣にはどのような神がいるのかも知らなかったが、今回のことで各地に妖怪たちを派遣してどのような統治が行われているのかを調べ始めてみた。

とりあえず、隣の祟り神は、ミジャグジさまという神々を束ねて王国を作り出しているらしい……。名前は洩矢諏訪子。

「では、参りますか……」

「……いつてらっしゃい」

「行ってきます(?)」

一人の青年と少女は、妖怪たちを後ろにひきつれ、行軍を開始した。

「今回の計画としては、悪いがお前たちにはミジャグジという神々

の引きつけやくになつてもらおう。そつちでミジャグジが戦っている間に俺が洩矢諏訪子を倒す。いいな？」

「……っ」

出雲の勢力範囲内ギリギリの地点でひっそりと彼らは作戦会議を行い、これから攻めようという時だった。

「諏訪子様、いましたぞ」

一人の人間の男が異形の集団に向けて指を指しながら自分の後ろの方に向かって叫ぶ。

「っ！！」

妖怪の一人が男に向けて咄嗟に刃物を投げるが、時すでに遅し。

彼の叫び声で、神力が近くに集結しつつあった。

「仕方がない、ミジャグジだけを迎撃しろ。洩矢諏訪子はこつちで潰す」

しかし、出雲の判断も早い。

過去に起きた戦いではこれ以上の事態など何度もなつた。

だからこの程度で焦ることはないのだ。そして、自分たちの上官がパニックになっていれば、下士官にもパニックが伝染するだろう。

だが、出雲は逆に落ち着いた指示を出す。一切の焦りや不安は見せず。

そのためか、逆に妖怪たちには安堵のようなものが広がっていった。

奇襲をかけても、相手がパニックになつたりしなければ普通に迎撃されることとなり、した側の方がい蓼を負うこともよくある。

「かかれっ」

相手のミジャグジの集団からそんな声が聞こえるとはほぼ同時に、白い蛇の神が大量に押し寄せてくる。その情景はまるで大地が凄まじい速さで動いているようでもあった。

「行くよ？」

出雲がわの陣営も美奈の声がかかると、白い蛇ミジャグジの神々を迎撃するために動き出す。遠距離の攻撃が得意なものたちは妖力弾を作つては

撃ち、作っては撃ちを繰り返したり弾幕を張って自分に近寄れないようにする。

逆に、接近戦が得意なものたちは素早くでミジャグジに接近するとその体を殴り飛ばしたり引き裂いたり、投げたりと様々な攻撃方法で、自分たちより数が多い敵をなぎ払っていく。

その優勢な戦況を確認した出雲は上空に飛び上がると、ミジャグジたちの後方へと飛ぶ。

そして、そこにはひとりの少女が待っていた。

「待ちくたびれたよ薬師出雲どの。私が洩矢諏訪子だ」

不敵に笑う少女に、出雲は悪寒を感じた。

その嫌な感じを払拭すべく、構えるが、洩矢は一切動こうとしない。それどころか多少啞然としたところもあった。

「私が全力で祟りを込めたのにねえ………」

「？」

洩矢の言葉をそのままの意味で受け取ると、先ほどの悪寒は洩矢が放った祟りだったということになる。早々に祟りで決着をつけようと考えたのだろうか、出雲にはその祟りが効かなかった。だから、啞然としてしまっている。

「まあ関係ないか、どっちにしろあんたは負けて私の下に降るのだからねッ」

洩矢の投げた鉄の輪を皮切りに、二柱の戦いが始まった。

それはまさしく、神々の争いとも言うべき争いが………

天気予報、一部地域で瓦礫と光の雨が降るでしょう

諏訪子の周囲の大地が盛り上がり、鋭い槍となって空中の出雲に向かつて襲い掛かる。

しかし、出雲は小手調べのような攻撃を食らうわけも無く、それは霊力の塊に掻き消される。が、諏訪子は手を休めることなく大地の槍を連射する。ときおり、それは形状を変えて横に向かつて針が発射されたりもしたが、出雲は難なく弾いた。

「さすがは黒霊峰の総大将か。でもまだ終わらないよ」

近くの山が、形を変えて大きな人の腕のような形になる。

「おいおい、まさかとは思うが……」

「そのまさかっ」

巨大な山でできた腕は出雲に轟音を立てながら迫り来る。

受け止め様にも、威力が強すぎるせいでただではすまないだろう。

しかし、下手によけてしまつては諏訪子本体からの神力による攻撃があると考えていいだろう。

ならば………。

出雲は右腕を前に突き出し、そこに魔力を集める。

魔力が光り輝くほど集まつた時に、それは放出された。

「マスタアアアスパアアアアク」

ごうっ

一閃

光が宙を駆け抜け、一本の線を作り出す。その線の射線上には巨大な腕があり、存在もろとも吹き飛ばされた。

「なめすぎてた、行くぞ」

「怖いねえ、じゃあ本気で行こうか」

二人から放たれる神力の量が急激に上がる。

その力の圧は、二人を中心として風が吹き荒れるほどである。

先手は出雲がとつた。移動しながら諏訪子に向けて霊力の塊を連射



する。が、その程度の攻撃は幼稚なものでしかなく、諏訪子は大地を盛り上がらせてそれを防ぐと自分も神力の砲弾と大地の槍を連射する。

二人の中間で二種類の弾幕が衝突して、お互いがお互いを消滅させる。

「はあああああああ」

弾幕の陰に隠れて接近した出雲は諏訪子に殴りかかるが、鉄の環によつて弾かれる。

しかし、諏訪子のほうも、衝撃でかなり吹っ飛ばされ、鉄の環も出雲の拳を受けたところから急激にさび始めていた。

「あんた、なにをしたんだい？」

「俺の能力だ、自然を操れる。お前の持っている武器は神力による加護があるとはいえ、自然のもの。さびの発生を早めただけだ」

「っ………」

お互い、中途半端な距離のため動けない。

下手に動けば逆に隙をさらけ出すこととなり、動かなければ攻撃も仕掛けるのが辛い。

「………、諏訪子」

「なんだい、出雲」

出雲は少し自分の腕へと視線を落としながら諏訪子に話し掛ける。

「耐えろよ、本気で行く」

「これまで本気じゃ無かつたつてのかい……」

そして、出雲の抑えていた霊力、魔力が開放される。

霊力だけで、諏訪子の神力の総量をあっさりと超えており、魔力、神力が追加されることで、量の問題で既に10倍近い差があった。その開放された分だけ、周囲にかかっている重圧も一気に増える。

何かを感じ取った諏訪子が腕を交差させてガードをするが、出雲は諏訪子のまん前へと目で捕らえきれない速度で移動して、ガードごと0距離で魔力の砲弾をぶつける。

野球ボールを投げるよりも軽く感じられるくらいあっさりと諏訪子

は吹き飛ばされ、空中で体勢を立て直すことができないまま、強力な追撃を受ける。

「ダブルスパーク」

2本の光が諏訪子に向けて飛び交っていった。

## 薬師見聞録『2』

薬師見聞録、強力な力を持つ神々の争いの章

著者 薬師出雲

（現代語訳より一部抜粋）

世界を創造した神々や、初期の神々などの一部の存在を除いて、神というものは人々が信仰することによって生まれる。

元はいえば、妖怪だったものがその強さゆえに神としてあがめられ、何百年という時間の中で妖怪としての存在を忘れられ、神としての力のみを残すことで完全な神になったものが土着神のなかにはたくさんいる。

そのほかにも、人々をまとめるために統率者が神という存在を作り、人々がその存在に従うという形式を利用して集落を統治しているものもある。そんな人に作られた信仰であっても、そこに神は誕生する。

妖怪は、人から恐れられることによって誕生する。

神々は、人からあがめられる事によって誕生する。

どちらも同じく人の感情から生まれた存在なのだ。

そのため、妖怪も神も人間も皆似ている。

姿かたちの話ではなく、存在としての話だが………

だがしかし、人にとっては神を認めることはできても妖怪を認めることはできない。

あたりまえだ。

あなたは自分たちに恐怖を与える存在を認められるか？

あなたは自分の仲間を殺す存在を認めることができるか？

残念ながらそれは無理な相談というものだろう。それが可能というものは少なからず、心が冷えあがってしまったている。

しかし、神々が全く人に害を成さないわけではない。

祟り神という存在を知っているだろうか？

祟り神は神の中でも特殊な部類。種類として、相手をたたる能力をもっている。その力は祟り神のそれぞれの力によって変わるが、人間を殺すようなことができるものもある。

想い神、もしくは思い神と表記するが、こちらの存在は妖怪と神のほぼ境界線上の真上である。

これは名前のとおり、完全に思いによって生まれた存在である。例えば、とある集落が妖怪に襲われたとしよう。そして、その集落は妖怪によって全滅した。人は、妖怪に殺される直前に妖怪を怨み、憎み、殺意を抱く。その感情が思い神となるのだ。

思いが強ければ強いほど思い神の力は強くなる。

そして、この神は最悪なことに理性というものが無い。存在を形作っている思いのみを考えて動くために、その思いを叶えるためにその邪魔となる存在を全て消す。それに人間も神も妖怪も動物も植物も関係ない。ただ殺す。力が強力だった場合、一番注意をしなければならぬ種類である。

付喪神。

これは道具が長い年月をかけて妖怪へとなるものだが、これによって生まれた妖怪は思い神と同じく、神と妖怪の境界線上にいますような存在である。

大事に使われてきた道具は、理性を持ち人を助ける行動もとる。

しかし、乱暴な使い方や、主人の悲劇に巻き込まれた道具は理性も持たず、悪霊と何ら変わらない。

結局のところ、妖怪も神も大差ないのだ。

新緑が芽吹く木々の下

彼らと一緒に歩いた道を思い出す

守れなかった

助けられなかった

忘れてはいけない

だが、それに縛られてばかりでもいけない。

罪は忘れてはいけないが、それに縛られつつけられてしまってもいけない。

自分の歩く道を見誤るな

自分の歩く道を踏み外すな

自分の歩く道をしっかり見つめる。

ゆっくり歩いていこう

焦るな、焦れば見逃す

大事なことは落ち着いていなければ分からない。

何か感じるものはあったか？

「あーうー、負けちゃったよ」

どうも、軽くお隣の土着神の洩矢諏訪子をぶつ飛ばした薬師出雲だ。で、俺の目の前にはカエルのような座り方をした諏訪子がいるわけなんだが、先ほどの戦いまでのような威厳はない。

それどころか、なんというか。

見た目のそのまんまのような気もしなくはない……………

……………。神の本性はこれか。

「で、俺が勝ったわけなんだが」

「信仰が欲しいの？」

「いや、いらん」

別にこれ以上信仰が増えてもなあ。

もともと人間だった分だけあつて崇められるとくすぐったいような感じがするし、どこか一線間を空けられているような気もする。

普通に俺と話してくれるのは一部の妖怪のみだ。それ以外は敬語を使ったりなんやらで……………。

「特に要望はないが……………、そうだな。下手に人を祟で殺すようなマネをするな。俺が治療しなければ少年がひとり死んでいた」  
「ああ、あの子ね。わかつたよ、それだけでいいのかい？」

「まあな。また何かあつたらこつちに来る。用があつたら使いでも飛ばしてくれ。こつちから用があつたら俺も使いを飛ばすだろうしね」

出雲はそれだけ言うと、妖怪とミジャグジの戦場へと飛んで近づいていく。

そして……………、

「帰るぞ、洩矢の神は倒したからな」

戦っている最中だったものも、問答無用で空中に引き上げて、引きずるようにして帰っていった。

「不思議な奴だったね……」

諏訪子はつぶやく。

これまで、信仰をかけたものにせよ、それ以外にしても戦争で負けたことはなかった。

そして、自分が蹴散らしてきた者たちは皆が皆、自分に信仰が奪われることを泣いてでも止めようとしたが、自分の手でそれを奪っていった。

今回、今度は自分が負けてしまった。だから信仰を奪われて自分は消えるんだと思っていたら、彼は信仰はいらないといった。

かわりに何を望むかと思えば人々を助けるようなこと。

「でも、手加減されてたのかな……」

彼女にとってはこれが一番心残りだった。

負けなしかった分だけあって、有頂天にでもなっていたのだろうか？と自分のこれまでを思い返すが、そんなことはないと思う。今回の戦争にだって、人も使つてミジャグジも人々から信仰を集める役のもの以外は全てつき込んだ。

それなのに負けたのは自分に落ち度があったわけではないと思う。

黒霊峰は武闘派の集まりとしても有名だ。

そんな彼らは100人程度の集まりなどではない。

その点に関して手加減をされてしまったし、自分への攻撃ももっと強いものもあったのだろう。

それに、彼は自分が崇った少年を治療したとも言った。

本当になに者なのだか……

「さて、帰ろうか。みんな」

諏訪子はミジャグジたちを引き連れて、社へと帰っていった。

これからは人への対応を変えたりしようか？



などと考えたりもしながら・・・。。

## のんびりと流れる時間

どうも、のんびりと生活するのが大好きな薬師出雲だ。

神社の奥の生活スペースに普段通りに居るわけなんだが、今日は客人が居る。

「諏訪子、俺の家に入り浸っていていいのか？」

「あーうー……………」

土着神の頂点といわれる洩矢諏訪子だ。

いつもではないが、俺に負けてから、こっちに遊びに来るようになった。

遊びといっても、鬼ごっことかをしているわけではなく、昼寝をしたり、食事をとったり、お茶を飲んだり、山の妖怪たちに混じって模擬戦をしていたりと自由奔放そのままだ。

「大将、洩矢さんの社ができましたぜ」

「はいよ、諏訪子。おまえの分社ができたそうだから加護をかけるぞ」

「何時の間に私の分社なんか造り始めていたんだい？」

「ちよつと前から、ほら行くぞ」

「うあ……………」

ずるずるずる……………」

モップのように地面にこすられながら、分社へと向かうことになった土着神の頂点、洩矢諏訪子である。

「諏訪子も帰ったし暇だ」

「そうだな……………」

「そつだよね？」

机に突っ伏したまま動こうとしない神と付喪神の三人であった。

しかし、日常は変なところから動き出すものである。

「?知らないところから信仰の力が来るな」

「出雲がさらに強くなっちまう、やめさせないとな」

「大将が強いのはいいことだと思うよ?」

出雲に対する信仰の力がどこからきているのかという興味の元、暇つぶしだけのために三人は力の発信源を探り出した。

「こつちだな・・・」

「まだかー」

「まだまだだと思うよ?」

三人のテンションもそれぞれでバラバラである。

が、ほぼいつもとても気が合う仲間のようにグダグダしながらも結局はやらなければならぬことを終わらせるのだ。

そして、彼らは出雲の勢力圏と、洩矢の勢力圏の境目まで来るも・

・・・

「まだ先か」

「えっ(?)」

洩矢の勢力圏から信仰の力はきていた。

つまりは、洩矢のリーダーである諏訪子が意図的に自分の勢力圏内でも進行されるように仕向けている可能性が高い。

出雲が自分の神社である薬師神宮のなかに諏訪子の分社を作ったのと同じように、分社を製作したか、祠をつくったようなことだろう。

「これは来いってことだろうな」

「行くの?」

「行くの?」

「行くだろ」

出雲は洩矢の勢力圏へと、二人の付喪神をつれて入っていった。

「あのあたりだな、飛ぶぞ」

「了解(?)」

三人の目には、一つの神社が映っており、出雲はその中から信仰が来ていることに気付くと飛んで行く。

そして、神社の敷地内に入る瞬間だった。

出雲の鼻先を掠めるようにして、霊力弾が飛び去っていった。

「……何しやがる」

出雲が放たれた方向、つまりは下を見ると巫女服を着た30人余りの少女たちが出雲に向けて霊力弾を一齐に放った。

一人一人の放つ数は少なくとも、30人もいれば密度だけなら神にも並ぶ。あくまで密度だけだが……。

出雲にかわすすべは無く、霊力弾の雨に飲み込まれたように見えた。巫女たちは獲物をしとめたことに気を抜くと、お互いの顔を見て手を取り合って喜んだ。

その行動のせいで気が付くのが遅れてしまった。霊力弾によって造られた煙が消え去った後には、周囲に6つの銅鏡をビットのように飛ばして、一振りの日本刀を持った出雲が無傷で立っていることに……。

「問答無用で放つだなんていい度胸してるな」

「大将にけんか売るなんてね、損な役回りだよ」

「あーあ、一方的な戦いになる気がするよ?」

出雲の口から、日本刀から、銅鏡からそれぞれの言葉が巫女たちの耳にも届いた。

## 諏訪の巫女たち vs 一人の刀付喪神

「く、撃て、諏訪子さまを守るんだ」

「……………は、はい……………」

巫女たちは靈力を圧縮して再び出雲に向けて弾幕を作り出すが、

「奇襲でもないのにこんな攻撃が……………」

魔方陣が複数顕われて、そこからは緑色の弾幕が絶え間なく放たれつづける。

一つ一つの弾は、少し進むと5つに分散して、またその先で分かれた弾がさらに5つに分散する。

それを幾度となく繰り返し、巫女たちのもとにたどり着くころには雨のようになっていた。

「……………きゃああああああ……………」

攻撃可能範囲の外側にいた、もしくは範囲内でもいち早く外に逃げたもの以外がすべて弾幕の雨にさらされる。いくら一発一発が小さくとも、靈力と神力のこもっている密度はとても高い。

「……………防ぎきれない。諏訪子さまに援軍を要請して、それまでは私たちで耐えるわ」

「わかりました」

リーダーらしき巫女が、すぐ近くにいた別の巫女に指示を出す。

その判断は間違えではないものの……………」

「戦力を減らすとするとするだなんてな、極力派手な技を使って社の中にいる諏訪子に戦いが起きていることを気づかせるべきなんじゃないのか？」

「大将の前ではあんまり関係ない気がするけどな……………」

「居ても1秒程度しか変わらないと思うよ？」

「戦略的な問題でなんだが……………」

三人は下の巫女たちの作戦の添削をはじめだす。

正直言っ出て雲たちにとって遊びながらも勝てるような相手だ。

「玲奈、一人でつぶしてこい」  
「何で俺が、何で俺なんだか」  
結局、出雲は美奈に任せる事にした。

日本刀になっていた少女は大地に足をつくところからともなく日本刀を召喚する。

召喚した日本刀を片手で構えながら言った。

「俺は霊鷲山玲奈、邪魔するやつはたたつ斬るぜ？」

妖力を一言一言に込めながら言ったその言葉は、それだけで巫女たちの数人を戦闘不能にする。

「おっ、まだ立ってるか。じゃあ、いくぜ」

次の瞬間、彼女の姿は先頭にいた巫女の目の前にあり、遠慮など一切なく銀色のものが走り、巫女は地にひれ伏すことになった。

「そ、そんな」

「うそ……」

「ぜんぜん見えなかっただなんて」

「なんなの……」

巫女たちに動揺が走るが、玲奈は一切気にすることはない。

「次は誰にしようか」

一方的な攻撃が始まった。

巫女たちがばらばらとはいえ霊力弾を放つても、日本刀であっさりと両断されてしまったりはじかれたりして玲奈本人にあたることはない。

逆に、玲奈はどんどん巫女と距離を詰めると銀色に輝く刃を走らせ、巫女をつぶしていく。

それだけではない、妖力を刀にこめて振り、そこからは妖力が飛ぶ

斬撃として放たれ、巫女の霊力弾や護符などを突き破って戦闘不能にする。

霊力を拳にまとわせて殴りかかる猛者もいるが玲奈は闘牛のような要領でかわすと殴りこんできた巫女の後頭部に、跳んだ状態で回し蹴りを叩き込む。

殴りこんだときの勢い＋後ろから受けた回し蹴りの衝撃でボールのように飛んでいく。

飛んでいった巫女の先には、別の巫女がおり……………

「え、あ、嘘おおおおお」

ゴスツ

鈍い音を立てて額同士がぶつかった。

数分後

「手ごたえがないな」

日本刀を死神がするように肩に乗せた玲奈だけが立っており、その周囲には巫女たちが気絶して倒れていた。

あくまで気絶である。

これまでの攻撃はすべて峰うちだったのだから……………

スタツ

スタツ

一人の青年と一人の少女がその横に降り立ち、

「ただの人にそこまでを望むな。だいたいおまえの相手をできる人間がいたらそいつはおかしい」

「大将が言えた話でもないと思うよ？この中で一番強いのは大将なんだから？まあ、玲奈お疲れさま？」

「大将ひでえ……………」

三人は先ほどまであったことなど気にするそぶりは一切見せず、談

笑する。

そして、そこにはひとつの水が差された。

「諏訪子さま、あいつらです」

「おし、後は下がってな私が倒すか……ら……？敵かと思った  
ら出雲じゃないかいつ」

巫女に連れられてやってきた諏訪子だった。



## せまる大戦の刻

「で、なんであんなに巫女たちはびりびりしていた？」

どうも、薬師神宮で祭られている薬師出雲だ。実際にはそんな名前の神社も神宮も存在していないから注意しろ。

で、それはともかくとして、今俺たち一行は諏訪神社の奥の居住スペースに諏訪子とのんびりしながらいるわけだ。

「ああ、出雲のところにも来たんじゃないのかい？大和の神々とやらから使いが」

「？面白い冗談をいる神力の弱い神なら来たが……」

「出雲、お茶を飲んで遠い目をするのかまじめに話をするのかどちらか選んでくれないかい？」

「あ、ああ。すまん。で、冗談の内容を言えばいいのか？」

「ヒョイツ、パクツ、もぐもぐ……」

「出雲、幸せそうに果物を食べるのかまじめに話すのかどっちかにしないかい？」

「……、わかった。内容は簡単だ。おまえみたいな変なやつが人々に信仰されるだなんて人々がかわいそうだ。だからわれわれのようなすばらしい神々におまえの信仰をよこせ。よこさないとおまえをブッコロスって言ってたな」

人に対していきなり変なやつだなんてことを言うだなんて本当に失礼なやつだったな。

隠していたら話は別だがほとんど神力も感じないし組織だというようなことも言っただけだが、あんなのが支社だと後ろの連中がどれぐらい強いのが読めないんだよなあ……」

「へ、返事はなんて言っただい？」

「ガキの冗談もおふざけが過ぎると可愛げがなくなるぞ。甘い果物をやるから帰って……」

「なんであんだ喧嘩を売ってるんだつつ」

いや、子供みたいな神だったからついな……………。  
ん？もしかして……………

「諏訪子、もしかしてこつちにも使者が来たのか？」

「ああ、マジぎれした子供の神が……………」

「あの子供沸点低いな……………」

そんな簡単にキレてたら将来はげるぞ。カルシウム摂取しておけよ。  
「大和の神々は実在するよ、恐ろしいぐらいの力を持っているらしい」

「じゃあ、暇つぶしぐらいにはなるか」

「あーうー、こつちはこつちで戦争やるんだから影響を及ぼさない  
でくれよう……………」

あーあ、諏訪子のほうでも戦争あるのか。

住民をこつちに逃がそうかと思っただけだな。それに戦力も借り  
ておこうかと……………。

仕方がないか、住民たちはどこかに隠すとして。  
戦力は山に集中させるか……………。

いや、それだと山に住み着いてくれている野生動物たちがまきぞい  
になる。かといって、人がいないとは言え人里で戦争をやれば結界  
張ったとしても家屋が壊れるだろうし……………。

山の外周でやるか。

「わるい諏訪子、ちょっと帰って攻めてこられたときの準備して  
く」

「……………負けるんじゃないよ」

「誰に言ってる……………おまえもだ諏訪子」

「そつちこそ誰に言ってるんだい、土着神の頂点だよ」

「俺に負けたのにか？」

「うるさいっ」

出雲は二人の付喪神を従えて宙へと飛び出した。

総指揮官として、自陣営犠牲がでないような策を。

そして敵である大和の神々に勝てる策を考えながら。

「いそげ、やつらはいつやってくるかわからないぞ。一時的に避難するだけだ。またすぐにこっちに戻ってこれる」

「早くしろ、対処が遅れちまう」

「大將が安全は保障するって言ってたぜ」

妖怪たちは、人々を里から逃がし、一時的な避難地区への退避を行わせていた。

すでに、里の外側には出雲が建設を行わせていた外壁、堀などがあるものの、それだけで防げるとは微塵にも思っていない。

それに、間者たちの得た情報によると大和の神々の大軍勢が出発の準備を行っていたとか………。

「出雲様に一度会わせてもらえんかい？」

「わりいな爺さん、大將は外壁の向こう側で最終チェックをしてる。無理だな……」

「そうかい、ならばしょうがないわい」

そういつて妖怪の横を老人は歩いていった。

人々は向かう、一時的な避難地区へと。

出雲を信じて。

治療・治癒の神として。

最強の戦神として。

自然の神として。

誰もが信じた。

自分たちの神様は誰にも負けないと。

だから強くなつた出雲は。神力が急激に上昇していく。

「大将、だいたい2日後に来るそうです」

「そうか、各員に通達。明日の明け方から妖力を半分大地に流し込め。それは昼までに終わらせてあとはゆっくりやすんで妖力を回復させること。会戦時には必ず俺の後ろに居ろ、大技のまきぞいを受けるぞ」

「了解です」

「やれることはやったか……………」

2日後、大和の神々が姿をあらわした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9047y/>

---

東方薬師見聞録

2011年12月24日09時50分発行